

ナギジリ一號古墳

1998年3月

長野県飯田市教育委員会

ナギジリ一号古墳

1998年3月

長野県飯田市教育委員会

序

社会の変化に伴って、飯田市内においても様々な開発事業がおこなわれています。それらに関連し、飯田市教育委員会では、埋蔵文化財の発掘調査を実施し、記録保存して後世に伝える事業を実施しております。

近年、飯田市街地における開発は飽和状態に達しており、市街地周辺へ企業や宅地が拡散してきています。それに伴ない道路環境の整備が進みつつある状況で、特にこの座光寺区においては、国道153号座光寺バイパスが開通して以来、沿線への店舗・事業所等の進出が相次ぎ、宅地開発が盛んになっていきます。

今回の開発も、飯伊地方の経済活動の振興などを考えますと、是認すべきといえ、事前に発掘調査をして記録保存を図ることもまた、大切なことであると考えます。

調査の結果は、本報告書のとおりでありまして、道路建設部分に限定されたとはいえ、古墳の石室を調査し、これまでの周辺で積み重ねられてきた調査成果に、さらに重要な知見を加えたわけであります。すなわち、地域の歴史解明が進むとともに、ひいては古代日本史の復元の一助となるものと確信いたします。

最後になりましたが、文化財保護の本旨に厚いご理解を賜りました関係者各位ならびに地元の皆様、現地作業、整理作業に従事された作業員の方々に謝意を申し述べる次第であります。

平成10年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 恭之助

例　言

1. 本書は市道改良工事に伴い飯田市座光寺2294-1番地で実施された埋蔵文化財包蔵地ナギジリ一号古墳発掘調査報告書である。
2. 調査は開発主体者である飯田市建設部土木課との協定のもと、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成8年度に本発掘調査を、9年度に整理作業および報告書作成作業をおこなった。
4. 調査実施にあたり、基準点測量・墳形測量作業を株式会社ジャステックに委託実施した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号NGJK-1を付して一貫して用いた。
6. 本報告書の記載については、遺構を優先し、遺構図・遺物図は本分と併せ挿図とし、写真図版は本文末に一括した。
7. 本書における玉類等の色調の比定は、講談社「日本語大辞典」による。
8. 本書は福澤好晃・小林正春が執筆し、本文について小林正春が加筆・訂正をおこなった。
9. 本書に掲載された図面類の整理・実測は、馬場保之・吉川金利・福澤が、遺物観察表作成は鳴海紀彦・福澤がおこない、遺物写真撮影は株式会社ジャステックに委託実施した。なお整理作業実施にあたり、調査員・整理作業員が補佐した。
10. 本書の編集は福澤がおこない、小林正春が総括した。
11. 本書に関する出土遺物および記録された図面・写真類は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路1004-1番地、飯田市考古資料館で保管している。

本文目次

序	2. 石室	15
例 言	1) 平面形及び規模	15
第Ⅰ章 経 過	2) 石材	15
1. 調査に至るまでの経過	3) 側 壁	18
2. 調査の経過	4) 奥 壁	18
3. 調査組織	5) 天井石	18
1) 調査団	6) 底 面	19
2) 事務局	7) 閉塞石	19
第Ⅱ章 遺跡の環境	3. 前部	19
1. 自然環境	4. 遺 物	22
2. 歴史環境	1) 鏡	22
第Ⅲ章 調査前の状況	2) 金環・銀環	23
1. 立 地	3) 勾玉・切子玉・小玉	24
2. 調査前の古墳	4) 馬 具	27
第Ⅳ章 調査の結果	5) 鉄 鐵	30
1. 墳 丘	6) 刀 子	35
1) 墳 丘	7) 土師器・須恵器観察表	36
2) 葦 石	第V章 ま と め	39
3) 周 溝	引用・参考文献	42
4) 土 層	報告書抄録	55

挿図目次

挿図 1 調査遺跡および周辺遺跡位置図	4	挿図12 勾玉・切子玉	25
挿図 2 調査地および周辺地図	5	挿図13 小 玉	27
挿図 3 基準メッシュ区画調査位置図	8	挿図14 馬 具	27
挿図 4 墳丘平面および断面図	12	挿図15 馬 具	28
挿図 5 石室上部平面図	14	挿図16 馬具(轡)	29
挿図 6 石室実測図	16	挿図17 鉄 鐵	31
挿図 7 石室断面図	17	挿図18 鉄 鐵	33
挿図 8 閉塞石実測図	20	挿図19 鉄 鐵	34
挿図 9 遺物出土状況	21	挿図20 刀 子	35
挿図10 鏡	22	挿図21 土師器・須恵器	37
挿図11 出土金環・銀環	23		

写真図版目次

図版1	ナギジリー号古墳周辺 尾根上部から 石室調査前	44
図版2	石室開口部（南より） 石室開口部（東より） 天井石（上部より）	45
図版3	石室内部	46
図版4	閉塞石 框石	47
図版5	敷石の状況	48
図版6	側壁の石積（東側） 側壁の石積（西側）	49
図版7	遺物出土状況（鏡 蓋・坏と勾玉 馬具）	50
図版8	鏡 金環・銀環 勾玉・切子玉 小玉 馬具（轡） 馬具（鞍具）	51
図版9	鐵鎌 蓋坏	52
図版10	平瓶 蓋 有蓋高坏	53
図版11	高坏 短頸壺 平瓶 坏	54

第一章 経過

1. 調査に至るまでの経過

平成5年10月、飯田市長 田中秀典から飯田市教育委員会宛に、平成8年度の市道改良工事に係る埋蔵文化財について回答が提出され、飯田市座光寺における市道宮崎唐洞線の改良事業の計画が示された。

事業予定地内は、ナギジリ一号古墳に位置しているため、平成5年11月5日、飯田市土木課・長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者が、現地で保護協議を実施した。

その結果、座光寺地区内で残存する古墳はかなり少なくなつており、本古墳もできる限り現状で残す必要があるが、現道そのものが古墳上にあり、その改良工事であり若干の工事変更で本古墳を保存することが難しいため、具体的な工事実施年度に、本発掘調査を実施し記録保存を図ることとした。

平成8年8月20日付8飯管第493号にて、飯田市長 田中秀典より、埋蔵文化財発掘の通知が提出された。そして調査の時期等について協議を実施し、平成9年1月6日、飯田市建設部長 井川弘志と、飯田市教育次長 龜割正夫との間で、ナギジリ一号古墳発掘調査に関する協定を締結した。

2. 調査の経過

調査前の本古墳は、現道路面のすぐ横の竹藪に、石室の天井石と側壁の一部が露出して口を開けた形で確認され、東側は土曾川へ下るように盛り土されて、平坦になっていた。西側から南側は、水路が通っている。また調査前の石室高は、入口部で0.7m、奥壁と考えられた部分で1.1mを測り、かなりの土砂が堆積しているものと予想され、石室は南側に延びて、側壁の残存状態は良好と判断された。

現地での作業は、まず竹を伐採した後、石室内の埋土を掘り下げるとともに、墳丘南東側の造成土の除去作業をおこなうこととした。しかし、天井石が割れており、落下の危険があるため、安全を確保しながら、調査には慎重を期しておこなわざるを得なかった。

平成9年1月20日に、(株)ジャステックに基準点設置・墳形測量作業を委託し、同日発掘調査に着手した。まず、作業員による石室周囲に繁茂した竹等の除去、および表面の崩落土の除去、また重機による造成土の除去作業をおこなった。

石室内部は多量の土砂堆積があり、順次掘り進めたわけであるが、天井石から約1.6mから2.1mの間に、焼土・炭を含む中世以降江戸時代を中心とした生活跡が確認され、浮浪者居住の地元伝承を証明することとなった。また、この時期の人骨が三体出土したため、作業進行に手間取った。なお本報告書では、中世以降の出土遺物等については、ここでの記述のみにとどめる。

2月19日には底面敷石が確認され、順次側壁・敷石および閉塞石の測量作業をおこなった。そして作業を進行するうちに、道路敷下奥壁寄り天井石の落下が確認され、奥壁の確認が困難となつたため、2月28日に重機による天井石の撤去作業をおこなって、石室の調査を再開した。

石室内埋土の水洗を調査と平行して実施し、3月12日写真撮影をおこなって、翌日重機による埋め戻

し作業をおこない、現地での作業を終了した。

3. 調査組織

1) 調査団

調査主体者	飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助					
調査担当者	福澤 好晃 小林 正春					
調査員	佐々木嘉和	吉川 豊	山下 誠一	馬場 保之	吉川 金利	
	伊藤 尚志	下平 博行	上沼 由彦	鳴海 紀彦		
作業員	新井 幸子	市瀬 長年	今村 春一	岡田 直人	木下 力弥	
	伊東 裕子	熊谷 義章	小池金太郎	小島 妙子	小林 千枝	
	佐々木 韶	清水 恒子	高木 純子	滝上 正一	竹本 常子	
	田中 黎	塚原 次郎	久田 誠	樋本 宣子	福澤 幸子	
	福澤トシ子	古林登志子	牧内 修	正木実重子	南井 規子	
	柳沢 謙二	吉川紀美子	吉川 正実			

2) 事務局

飯田市教育委員会博物館課

矢沢 与平	(博物館課長 平成8年度)
小畠伊之助	(" 平成9年度)
小林 正春	(博物館課 埋蔵文化財係長)
吉川 豊	(" 埋蔵文化財係)
山下 誠一	(" ")
馬場 保之	(" ")
吉川 金利	(" ")
福澤 好晃	(" ")
伊藤 尚志	(" ")
下平 博行	(" ")
牧内 功	(" 庶務係)

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 自然環境

飯田市座光寺地区は市街地の北東4kmにあり、北東を下伊那郡高森町、南東は天竜川を挟んで同喬木村、南西を飯田市上郷と接しており、飯田市の北端部に位置している。

飯田市は伊那山脈と木曽山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴ない、大小の段丘崖が形成されており、山麓部は扇状地を形成し、総体としては細長い盆地地形をなしている。

座光寺地区の場合、断層運動でつくられた段丘で大きく上段と下段に分けられる。上段は木曽山脈の山裾部から大規模な扇状地が発達し、扇端から段丘縁辺にかけては小河川の開析・湧水等微地形の変化が著しい。特に地区を区画する北側の南大島川、南側の土曾川・柄ヶ洞川による扇状地の形成、開析谷の浸食は著しい。下段は数段の小段丘からなり、恒川遺跡群が立地する上位の段丘面の場合、北側は南大島川から扇状地が発達するのに対し、南側は比較的段丘面がよく残る等複雑な微地形を呈する。

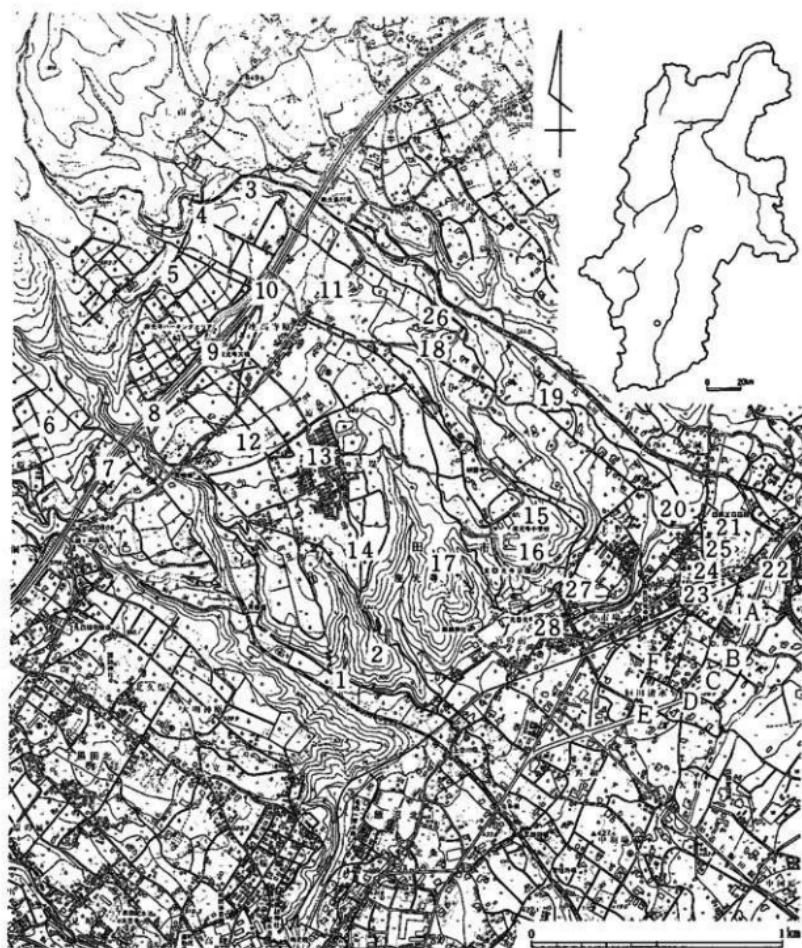
ナギジリー号古墳は飯田市座光寺地区の南端に所在する。座光寺地区と上郷地区を区画する土曾川が木曽山脈より流れ出しており、上位段丘部分では急峻な開析谷を形成している。上郷側は垂直に近い崖面をなし、座光寺側は傾斜面となっている。古墳はその斜面中位に、自然地形を利用して構築されている。

2. 歴史環境

座光寺地区は土器・石器等の遺物や古墳の多いことで古くから知られており、埋蔵文化財包蔵地が濃密に分布している。こうした文化財に表われた先人達の活動の証しは旧石器時代末までさかのぼる。前述の自然環境で概観した地形的特徴が当地区の遺跡立地に大きく関わっており、上段と中・下段で遺跡の分布や性格が異なっている。また、発掘調査された遺跡が多く、全時代にわたって具体的な様相を描くことができる。

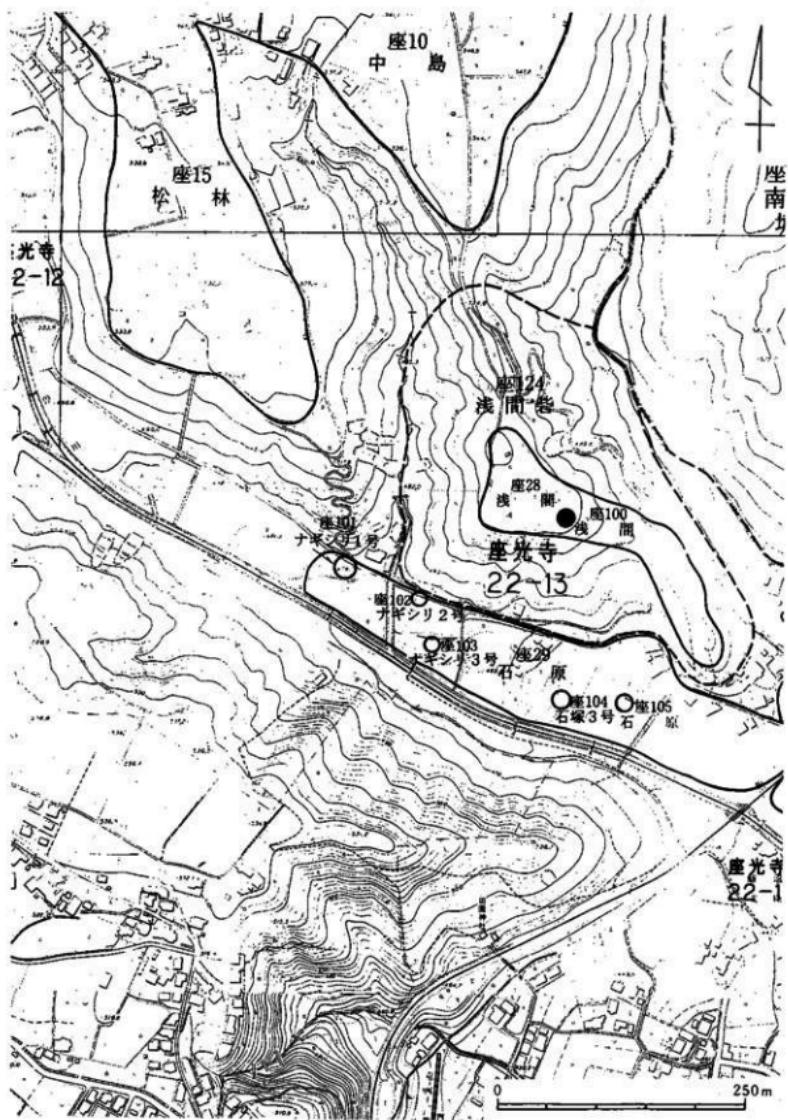
上段では繩文時代から弥生時代にかけての遺跡が多く、とくに山麓部には繩文時代の遺跡が集中し、鳥居龍藏の調査で知られた大門原遺跡等、また、扇端から上段の段丘崖にかけては弥生時代後期の標式遺跡である座光寺原遺跡・中島遺跡がある。

繩文時代早期は、宮崎A遺跡（長野県教委 1971）・米の原遺跡・大門原遺跡で押型文土器が出土している。中期は多くの遺跡が知られているが、発掘調査された事例は少ない。大久保遺跡では、中期初頭の竪穴住居址1軒が調査され、良好な土器群が得られている（飯田市教委 1997）。大門原遺跡は東面した緩傾斜の扇状地扇尖部分にあたり、大規模な集落址の存在がうかがえる。平成8年度に農道改良に伴い発掘調査が実施されており、繩文時代中期中葉から後葉の伊那谷有数の大集落が広がっていることが確認されつつある。この他、宮崎B遺跡・座光寺原遺跡（今村 1967）・宮崎南原遺跡では、繩文



1. ナギジリ1号古墳 2. 津間番 3. 大井遺跡 4. 大久保遺跡 5. 大門原遺跡
 6. 米の原遺跡 7. 宮崎A遺跡 8. 宮崎B遺跡 9. 大門原B遺跡 10. 大門原D遺跡
 11. 井下横古墳 12. 南原遺跡 13. 座光寺遺跡 14. 中島遺跡 15. 北本城城跡
 16. 北本城古墳 17. 南本城城跡 18. 半の木遺跡 19. 芒野3号古墳
 20. 鮎地1号古墳 21. 石行遺跡 22. 新井原12号古墳 23. 高岡1号古墳
 24. 高岡3号古墳 25. 高岡4号古墳 26. 美女遺跡 27. 金井原瓦窯址 28. 如来寺境内
 恒川遺跡群…A. 新井原 B. 新屋敷 C. 恒川B D. 恒川A E. 田中・倉垣外 F. 菩提塔外

図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図



挿図2 調査地および周辺地図

時代中期後葉の住居址が調査されている（長野県教委 1971）。後・晚期は、断片的に遺物出土がみられるのみで、人々の生活の場は確認されていない。山中の大笛遺跡（周辺遺跡位置図範囲外）では、後期前葉の注口土器等が出土している。南大島川線の大井遺跡では、詳細時期不明であるが、3基の集石が調査され、川に面した臨時の調理場と考えられている（飯田市教委 1997）。中期に比べると低地に寄った集落展開が考えられる。

弥生時代は、中期の遺跡はほとんど知られておらず、後期に遺跡数の急激な増加がみられ、米の原遺跡や大門原遺跡でも土器片が採集されている。高燥な台地上に生産基盤を求めて該期に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。後期前半の座光寺原遺跡（今村 1967）や大門原B遺跡（長野県教委 1971）は後半までは継続しておらず、短期間に集落が廃絶している。続く後期後半では、中島遺跡（下伊那誌編纂會 1991）・宮崎A遺跡等の調査例がある。中島遺跡は、昭和50年農業構造改善事業に伴ない、道路部分が調査され、さらに、平成8・9年度には広域農道新設に先立ちその東側部分が発掘調査され、大規模な集落であることが改めて確認された。座光寺原遺跡・中島遺跡とも低湿地を控えており、畑作と水稻を組み合わせていたと考えられる。

古墳時代は、大井遺跡で南大島川旧河道から管玉2点が出土しているが、他に当該期の遺構が確認されていないことから、遺跡の性格等不明な点が多い。この他、上段では、古墳は井下横古墳1基があるのみで、考古学的な痕跡は稀薄となる。同様に奈良・平安時代についても断片的に遺物が得られているにすぎない。古墳時代以降は散在的な集落景観が考えられる。

中世は、段丘崖上部に北本城城跡（1981年調査）・南本城城跡。浅間谷が築かれ、小河川に開拓された複雑な地形を生かしている。北本城城跡は4つの曲輪を主体とした居城的な城郭で、16世紀中頃松岡氏の支城であったとの伝承がある以外は記録等全くなく、その築城・廃城の時期や治めていた氏族等も不明である。現在のところ、座光寺の地名に共通する座光寺氏の居城であるという説が有力である。平成2年度に行なわれた児童センター建設に先立つ二の曲輪の調査では、恒久的な施設のばかりでなく簡易的な施設も確認され、この部分が居住機能と防衛機能とを併せ持っていたことが明らかにされた（飯田市教委 1992a）。南本城城跡は、現在でも良好に当時の姿をとどめている城跡で、防衛施設の整った防衛専門の城郭である。

近世は、大門原D遺跡で火葬墓・土葬墓5基が調査されている（長野県教委 1971）。

中・下段地帯は縄文時代から近世にかけての遺跡が複合しており、時代毎に中心となる地点を若干異にしている。縄文時代の集落は主に南大島川から発達した扇状地及び低位段丘東端部に立地する。縄文時代中期を除く他時期は遺物の出土が中心で集落の実態は明確でないが、資料が十分でない各期にあって比較的良好な資料を提示している。旧石器時代終末から草創期にかけての遺物は、石行遺跡で中世の溝址から有舌尖頭器が出土している（岡田 1986）。早期は石行遺跡で細久保式土器・沈線文土器・条痕文土器などが出土している他、恒川遺跡群の新屋敷遺跡では相木式の遺物集中や塩屋式期の遺構等があり、細久保式・高山寺式土器等も出土している（飯田市教委 1986）。半の木遺跡（1996年調査）でも樋沢式や茅山下層式といった土器や同じ時期の遺構が調査されている。前期は断片的な資料が恒川遺跡群で得られているにすぎない。しかし、中期については、新井原遺跡で後葉のかなり大規模な集落の一部が調査されており、低位段丘の大規模集落の存在に目を向けることになった。後期から晩期の

前半にかけての様相は、前期同様詳らかではない。晩期終末には石行遺跡から竪穴住居址と浮線文系や条痕文系の土器群が見つかっている。

弥生時代には、中期前半は断片的な資料はあるものの、これまでのところ遺構が認められない。後半には恒川遺跡群で40軒以上の竪穴住居址が調査されており、広範に住居址が分布し、段丘上全体を居住空間とした集落展開がする。後期前半には遺構の分布が稀薄になり、段丘上の特定地域に居住空間を限定した可能性が指摘されている。後半になると住居址が恒川遺跡田中地籍に集中し、その中でも台地縁辺部の集落域より内側の墓域の分化がみられるようになる（飯田市教委 1988）。

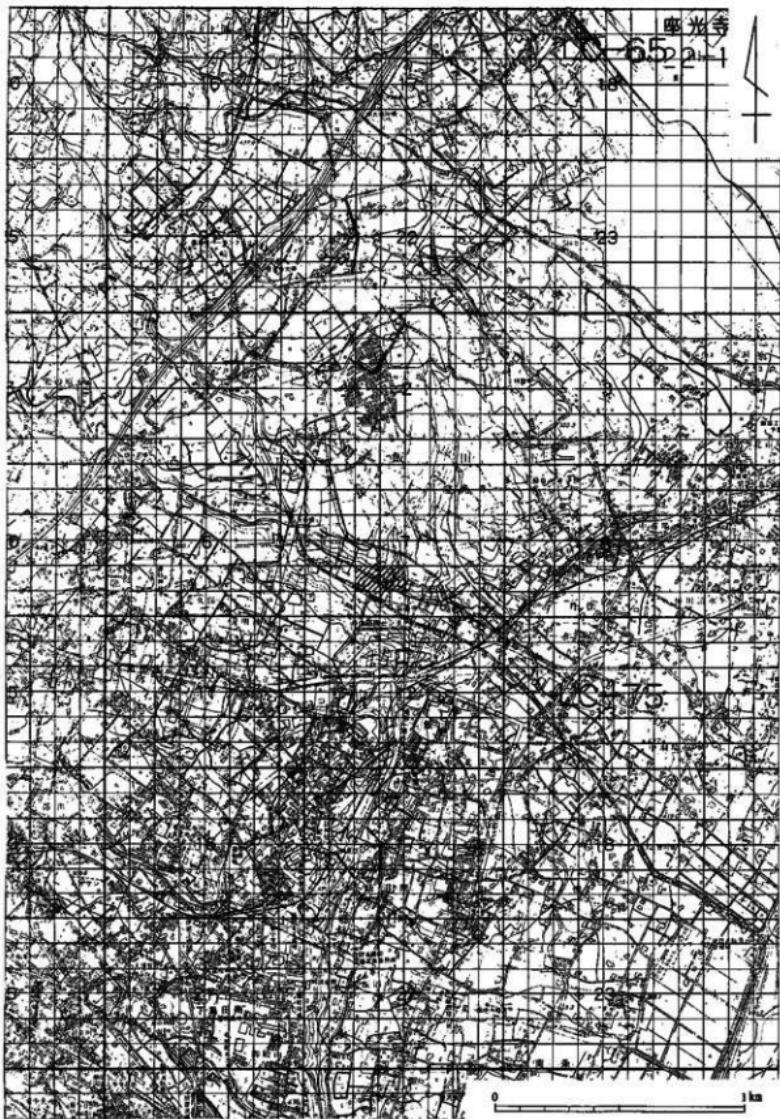
古墳時代前期においては、基本的に前時代にみられた集落展開が継続する。中段の半の木遺跡でも住居址1軒が調査されている。後期になると、住居址が増加し、恒川遺跡群ではほぼ全域に分布が拡大する。遺物等からみた3～4小期の変遷では、奈良時代直前には新屋敷遺跡や恒川遺跡恒川B地籍に限定的に遺構がみられることから、この時代の集落の在り方は必ずしも一様でなく、終末期にはより政治的な規制が加わった可能性が指摘されている（飯田市教委 1986）。古墳は竜丘地区・松尾地区に次いで多く築造されている。その分布は集落の外縁の、長野県史跡の前方後円墳高岡第1号古墳を中心とする北部の扇状地扇頂付近および恒川遺跡群東側の段丘崖上等にみられ、集落域・生産域とは分化された姿がある。

これまで調査された古墳は、新井原12号古墳（1922年・1980年調査、飯田市教委 1986）をはじめとする新井原古墳群、畦地1号古墳（1923年他調査）、北本城古墳（1981年調査）、壱丈藪3号古墳（1984年調査）、高岡3号・4号古墳（飯田市教委 1990）等がある。

新井原12号古墳は、4号土坑から馬具・馬骨が出土し、12号墳に伴うものと考えられる。新井原2号古墳では周溝内より、古式の輪證・埴輪等が出土した他、馬を埋葬した土坑3基が見つかっている。高岡4号古墳とともに5世紀代の古墳である。北本城古墳は、上段の段丘の縁に占地する小規模な前方後方墳もしくは前方後円墳で、特殊な側壁構築法による初期の横穴式石室を埋葬施設としている。同様の石室構築法による古墳として、畦地1号・高岡1号古墳がある。

古墳分布の中心範囲から、南大島川・土曾川を遡上した地点に構築された、壱丈藪3号古墳やナギシリ1号古墳は、副葬品に後期古墳に特徴的とされる馬具類が多く、追葬の結果複数組の金環がある。

奈良時代には信濃国伊那郡に含まれ、恒川遺跡群はかねてより古代「伊那郡衙」ないしは『三代実録』にみられる定額の寂光寺の有力な比定地とされてきた。昭和51年度から実施された一般国道153号座光寺バイパス建設に先立つ恒川遺跡群発掘調査の結果、大型掘立柱建物址群や硯・鉄鉢・和同開珎銀鏡等の官衙的遺構・遺物が多数発見されている（飯田市教委 1986）。そして、昭和57年度から飯田市教育委員会が継続実施している範囲確認調査の中で、古代「伊那郡衙」が追究してきた。その結果、平成6年度の調査で正倉となる大型の掘立柱建物址が調査され、なお郡衙の中心部は不明であるものの、具体的な地点をあげて推定される段階に至った。同時に遺跡群内の各地点が果たした役割が遺構分布状況から描出されてきている。さらに平成7・8年度の薬師垣外地籍の調査では、区画の溝内部から古瓦が出土し、郡衙中心部ないし寺院が付近に存在する可能性が指摘されている。また、バイパス周辺の諸開発に先立つ緊急調査の結果、田中・倉垣外地籍、新屋敷地籍周辺の遺構分布が明らかにされつつある（飯田市教育委員会 1988・1991a・1991b）。この時代には金井原瓦窯址で瓦生産が行なわれ、半地下無段式窯窓1基と工房址2棟が調査されている（宮澤 1953・54、飯田市教委 1996）。西三河北野系の影響



挿図3 基準メッシュ区画調査位置図

を受けているとされ、高森町古瀬遺跡からも同范の瓦が出土している。また、前述の恒川遺跡群薬師垣外地籍の他、如来寺境内・古瀬平遺跡・石行遺跡からも古瓦が出土している。

平安時代から中世にかけては、恒川遺跡群を中心に住居址・建物址・溝址・土葬墓・火葬墓等が調査されている。恒川遺跡群では、平安時代前期には前時代の名残りとして官衙的な遺構・遺物があるが、中期以降一般集落に変貌していく。こうした中で小鍛冶遺構を伴なう住居址が多いことから、前代の郡衙との関わりが指摘されている。新井原遺跡では灰釉陶器藏骨器を伴なう火葬墓1基が調査されている他、中世には石行遺跡では土葬墓・火葬墓が多くあり、古墳時代以降連続してこの辺りが墓域であった様子がうかがえる。

第Ⅲ章 調査前の状況

1. 立地

本墳は、天竜川支流の土曾川中流域にあたる標高479m程の左岸南傾斜面に構築されている。

周囲の状況は、土曾川が上位段丘面を開析したことにより、形成された谷地形を成し、右岸上郷側は急峻な崖となり、崖直下を土曾川が流れる。左岸座光寺側は、若干緩やかな傾斜面を成し、幅30m程の氾濫原による緩斜面があり、それより北側が急峻となり、上位段丘面に至る。

この緩斜面部と急傾斜部の変換する線上に、市道唐沢線が敷設されている。また、古墳の位置から東方50mに上位段丘上から流下する沢があり、土曾川に向かって段丘斜面を開析しており、崖部を出た所で幅20m程の小扇状地を形成している。

古墳は、この小扇状地の西端部の市道敷下に構築されており、墳丘の一部は、この扇状地の地山を利用する形となっている。

また、石室の開口する南側は、傾斜面の下部側にあるため、盛り土はほとんどされていない。現在の土曾川流路面と古墳底面との比高差は約7mを計る。

古墳の所在する位置から上流側の約300mまでは、同様の地形を成し、さらに上流部は谷地形も消え、わずかに沢筋のみとなって、山麓部に吸収されている。

一方、下流側は古墳から約400mの間が同様地形を成すが、その下流は低位段丘面部に至ることもあり、谷地形は消滅し、小規模な扇状地形を何箇所かで形成し、天竜川に合流する。

本古墳所在地から下流側の谷地形を成す部分には、4基の古墳の存在したことが確認されており、この谷地を拠点とした一族の墓の一つとしての本古墳が位置づけられる。

2. 調査前の古墳

早くに開口され、浮浪者等の居住も伝えられていた本墳であるが、調査前の状況は、墳丘の全面に竹が繁茂していた。

市道際に、天井石と判断できる大石2つが認められ、この南側に幅1m・長さ1.5m程の穴が開いていた。この穴の内部に入ると、大石2つの下部は空洞になっており、その両側に石積みの一部も観察でき、前記の大石が天井石であることが確認された。しかし、この2つの天井石が石室の最奥部にあたるか否かの判断はできなかった。

開口部で観察される天井石・側壁の状況から、副葬品等の存在は望むべきもないが、石室はある程度の状態で残存している可能性が高いと推測された。

墳丘の南側裾部は、井水が通されており、あたかもここで墳丘が終息している感を受けるが、その下方が宅地造成に伴う道路敷設のため、墳丘端部の把握は困難であった。

一方墳丘の南東端は、井水の直下が畑となるが、井水との比高差約4mを計り、墳丘そのものがほぼ

この井戸付近で終わると判断された。

墳丘西側は石垣で堀を画しており、本来の墳丘より規模は縮められていると判断された。

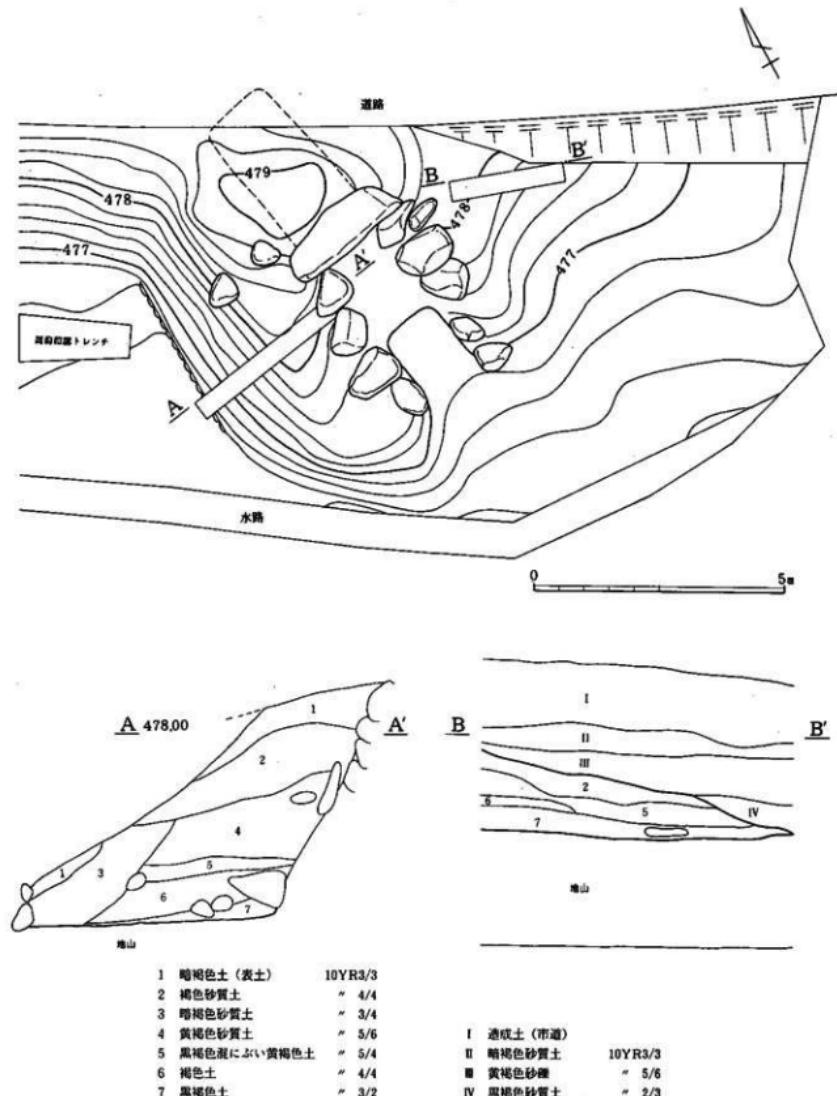


図4 調査遺跡および周辺遺跡位置図

第IV章 調査の結果

1. 墳丘

1) 墳丘

墳丘は尾根傾斜地の地形を利用して構築しており、その市道改良部分のみ調査したため、墳丘の全容把握は困難であり、規模・形態の全てについては、確認することはできなかった。しかし石室の規模より、現況で残存する墳丘は、西側を畑、東側は農作業用進入路として、南側は水路により切り土され残存していないが、墳丘15m前後と推測される。

墳頂部にあたる位置は、市道により削平され、このため一部天井石が石室内に崩落している。

墳丘の全体に後世の手が加わっており、原形は知るよしもないが、立地する微地形から見ると、小扇状地の西端部に築造されたため、正円形を成さない可能性がある。西側は残存高でみても、2m以上の段差があり、若干の削土はあったにしても旧状に近い可能性がある。

一方、東側は扇央部にあたるため、緩やかな傾斜となっており、一定規模の墳丘盛土のあった可能性が高い。

2) 蓋石

墳丘は、前述のとおり全体にかなりの削平されており、蓋石は確認されなかったが、礫の残存状態から全面にわたる蓋石はなされなかつたと考えられる。蓋石が存在したとすれば、部分的であった可能性が高い。

3) 周溝

墳丘の東西で確認トレンチによる調査を実施したが、周溝を抱えることはできなかった。

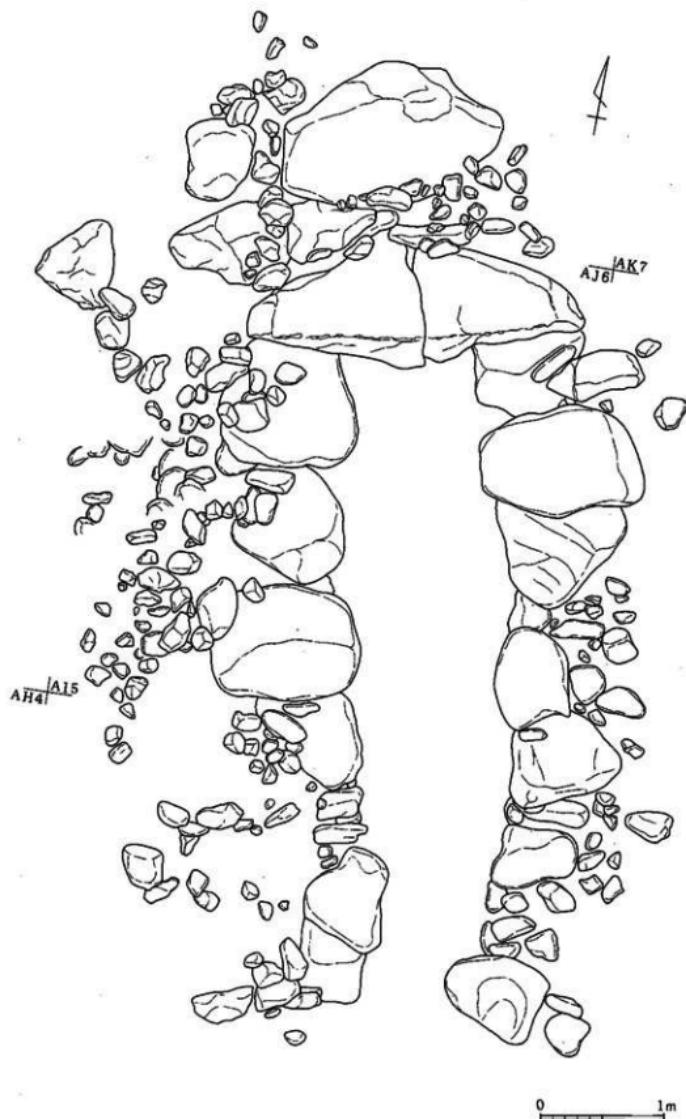
自然地形を最大限に活用しており、北端の道路敷下に区画的な溝が設されていた可能性はある。

4) 土層

地形を形成する地山と墳丘盛り土については、墳丘東・西トレンチで、盛り土されたと考えられる土層が確認された。土層観察状況を以下に記す。

1層は全体を覆う表土で、一部に炭・竹の根等の擾乱が入る暗褐色砂質土である。この層は、上部側壁および天井石に面しており、墳丘構築時は盛り土であったと考えられる。

2～6層は、墳丘の盛り土と考えられ、比較的良好に層序を成している。2層は砂礫混褐色土、3層は暗褐色砂質土、4層は黄褐色砂質土で、いずれも地山の土に近いものである。5層は黒褐色混にぶい黄褐色砂質土で、墳丘構築時の表土混入と思われる。6層は褐色土で、径20～40cm程の礫が入る。7層は黒褐色土で若干の粘性がある。この層が、墳丘構築当時の生活面と考えられる。



挿図5 石室上部平面図

また西端の二段に積まれた石は、畠造成時に積まれたものである。

なお、道路敷下に石室自体は埋没することになるが、道路の強度などを考慮する必要があり、それぞれのトレンチによる断面観察は、石室際までの実施ができず、平面では裏込石と思われる径10~40cm程度の疊が確認されたが、断面ではほとんど現れていない。なお、東側トレントのB-B'に認められたI~IV層については、既存の道路建設に際しての造成土であり、この道路が江戸時代頃から自然災害等に合わせ、改修を繰り返していたことも確認されたものである。

2. 石室

1) 平面形及び規模

本墳の埋葬施設は、調査前の石室露呈状況で推測されたとおりの横穴式石室である。

天井石・側壁等がかなりの部分で後世の破損を受けているが、残存部から構築時の姿を推測可能な状況であった。

石室平面形を見ると、みかけ上は当地方横穴式石室の大半を占めるとされる無袖式の石室である。しかし、底面形を詳細に見ると、奥壁から入口側に6.10mの箇所で、最下段の石が中心部側に幅を狭めて配置され、玄室と羨道を区切っており、この位置が玄門部と判断される。また、その位置から入口側に30cm程寄った位置に框石が置かれ、ここを玄門と判断することもできる。

玄室平面形は、奥壁に向って右側がほぼ直線をなすが、左側壁はその中央部付近が外側に30cm程膨れ状の曲線をなし、総体的にはほぼ長方形の平面となる。

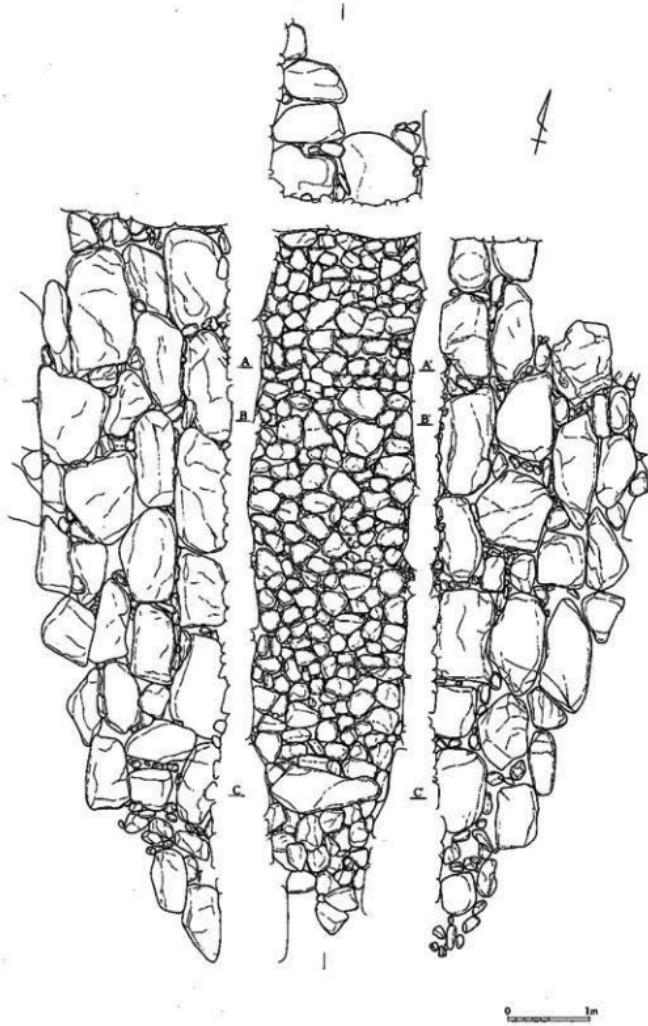
石室規模の細部については、別表のとおりであるが、残存する石室全長は、8.8mであり、後述する入口部における閉塞石の分布状況から、左側壁の南端部が石室入口部と判断でき、築造時の石室長を保つといえる。

2) 石材

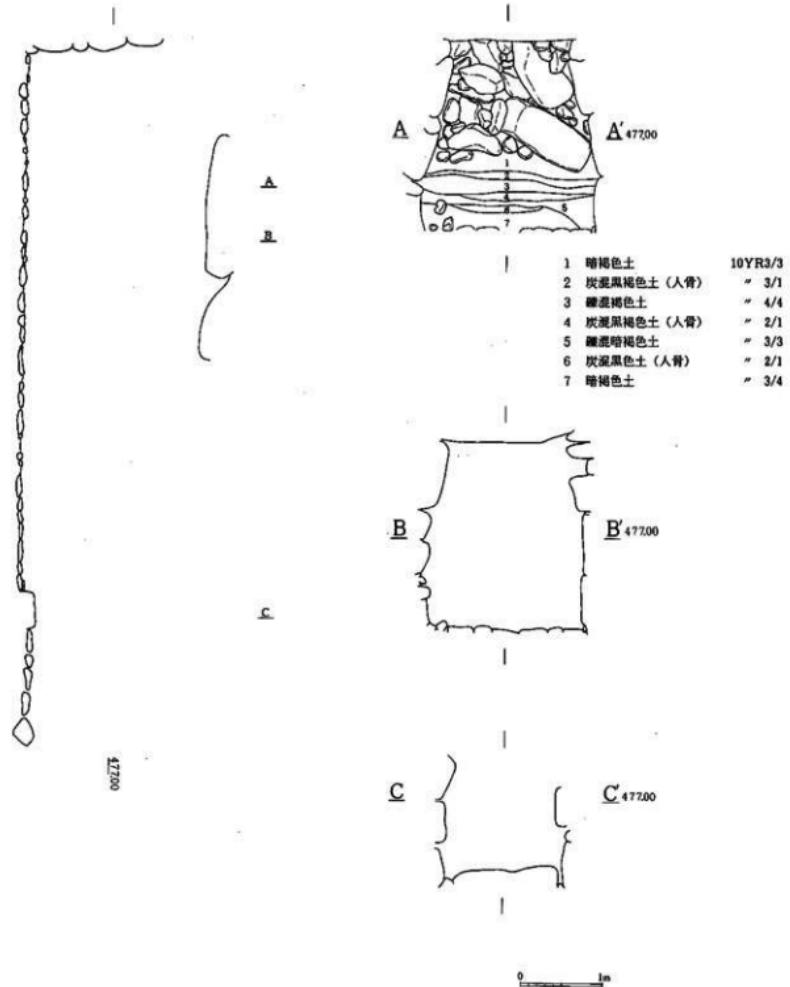
本石室は、すべて花崗岩系の石材で構成されている。いずれの石材も、若干の摩耗面を有するが、總体に角の残存するもので、あまり淘汰されておらず、野底山山塊を供給源とし、近接する土曾川の中・上流域における土石流中に存するものである。この状態の石材は、本墳周辺の土曾川流路中および氾濫原堆積土中に、ごく普通に見られるものであり、本墳築造材も、直近の位置から持ち運んだものといえる。

表1 石室規模計測表

規 模		(単位m)	() 残存数値
左 側 壁 長		(8.8)	
右 側 壁 長		(8.8)	
玄 室 長 (側 壁)		6.6	
玄 室 長 (框 石 中央)		6.5	
羨 道 部 長		2.4~2.2	
玄 室 奥 壁 部 幅		1.8	
玄 室 最 大 幅		2.0	
玄 門 部 幅 (側 壁)		1.9	
玄 門 部 幅 (框 石)		1.5	
羨 道 部 幅 (両壁残存最少部)		0.9	
天井石残存高 (左壁部)		2.25	
天井石残存高 (中央部)		2.25	
天井石残存高 (右壁部)		2.35	
奥 壁 部 残 存 高		(2.10)	



挿図6 石室内実測図



挿図7 石室断面図

3) 側壁

左右両壁とともに、天井石の欠損部分にあたる側壁材も欠落しており、旧状を保っていないが、残存部の状況から、壁構築の大要は判断可能である。

右側壁が4段、左側壁が3段を基本として石材を積み上げ、天井石を構架している。細部の構築状況は、左右で若干の差が見られる。また、底面で確認される玄門部の変化が、左右両壁でも認められる。

天井石残存部で、その断面形を見ると、最下段の石はほぼ垂直の壁面をなすが、2段目から上を、20~30cmの持ち送りとし、その上に天井石を構架しているため、肩の膨らんだ台形状をなす。

右側壁は、入口側の上部石積みが消失するほか、奥壁側の上部も天井石とともに崩落し、旧状をとどめない。玄室部の残存する石積みは、下3段が60~70cmの厚さで削えられ、最上段の石材は、50cm弱と不揃いである。

羨道部石材は上部を欠くが、玄門付近で2段目から石材の大きさが乱れ、玄室部石材に比べて小型である。

左側壁は、右側壁に比べ上段部で統一性が欠如している。下2段はほぼ水平に積まれ、右壁と同様であるが、3段より上部は石材も不揃いであり、右壁の3・4段目に対応する部分は、大小の石を2ないしは3段積みとし、みかけ上は1つの段をなす。玄室部石積みは、右壁とほぼ対応するが、玄門部2段目の石材は縦位に据えられ、玄室・羨道の区別を意識している可能性がある。

玄門部の両側壁残存部最上段は、底部からほぼ1.5mの位置で水平面を持っており、この上に天井石が据えられたことも考えられる。天井石そのものが残存せず、推測の域を出ないが、当方無袖式横穴式石室に類似の多い、羨道部天井石の高さを玄室部より低くする構造であった可能性もある。

4) 奥壁

右側上部は、天井石とともに崩れていたため、構築状況のすべてを明確にできないが、残存部の状態は、下部ほど大型の石を用いている。石積みの状態は、基本的には2列4段にはば水平であり、右側壁と共に通する。

5) 天井石

天井石は、奥壁寄り部分の側壁上に構架した状態で、2個が残存した。2つの石は、いずれも不整形のため双方の間に比較的大きな隙間が空き、それを充填する石材も天井石とみなすことができる。2つの石は、いずれもかなり大型であり、石室内面部はほぼ平坦をなす。入口側の天井石は、現状で2.8×1.2m、厚さ90cmを測るが、入口側部分に後世の矢穴痕があり、ある時期に割り取られたものと考えられ、当初は現存に倍する大石であったと思われる。また、その際もしくは後世かは不明であるが、残存部はその中央で2つに折れている。

奥壁側の石は1.9×1.2m、厚さ90cmで、もともとは前者よりは小さめのものといえる。

また、奥壁部の石室内に同規模の石が1個、崩れ落ちた状態で確認できた。この位置は市道の下に当たること、石の埋土に江戸時代に比定される土層が確認されることより、本来奥壁部に構架されていた天井石が、江戸時代以降の道路工事等により崩落したものといえる。

なお、いずれの天井石も前述のとおり不整形であり、相互間には比較的大きな隙間が空く結果となり、それを充填するために、大きめの石を挟み、さらにその隙間部分を人頭大から拳大の礫で覆い、覆土していることも確認された。

また、崩落したものも含め3個の天井石が認められたが、本来は石室上全体に存在したはずであり、羨道部も含めて3～4個の石が、後世に抜き取られたといえる。

なお、側壁の項でも記したとおり、羨道部天井石は玄室部よりも、一段下げて構架されていた可能性がある。

6) 底面

平面形については、先記のとおり無袖式の羽子板状をなし、羽子板の肩部が玄門にあたると判断される。

一方、底面の石敷と框石から、平面形で考えられる位置より入口側に玄門を考えることもできる。框石は長さ1.4m、幅0.5m、厚さ0.3mの石を、底面石敷の上に石室方向と直交して置いている。この框石を境として、玄室は羨道部より16cm程低く、段を作っている。このことは石室構築時と、実際の石室利用時における玄室・羨道の区画に、差異の生じた可能性も考えられる。

玄室部底面は、径10～40cm前後の石の平坦面を上部として、丁寧に敷き並べられ、全面が敷石された状態で検出されたが、その配置等について規格性等は把握できなかった。

羨道部は、径15～40cm前後の平坦面を上部として敷石しているが、玄室と比較すると若干難で、凸部が上面となるものもある。框石部での幅は1.3m、入口部側で0.9mと狭くなるが、入口部分は水路掘削等後世の擾乱のため確認できず、どの位置まで敷石されたかは判断できない。

7) 閉塞石

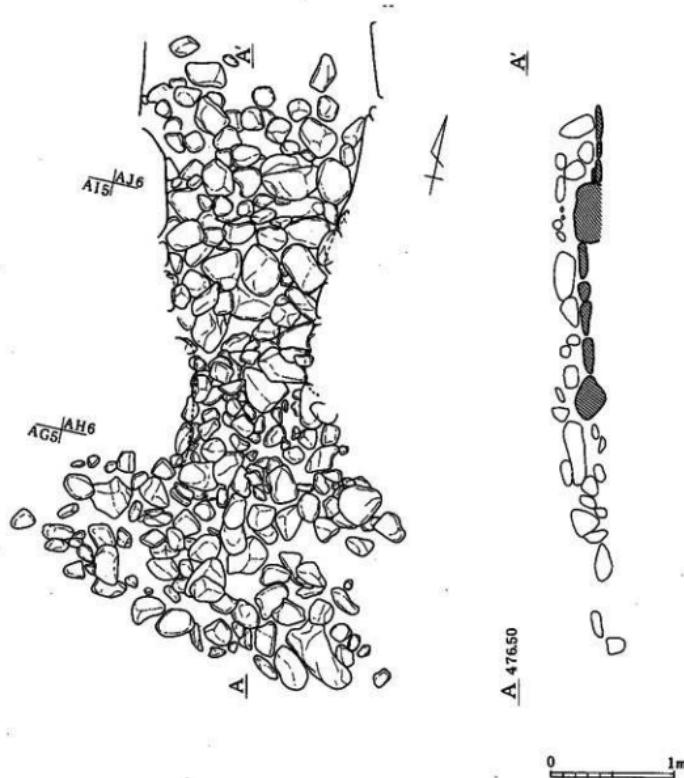
石室全体のかなりの部分が破損しているために、石室内部全体に大小の礫が入り込んでいたが、框石付近から入口部およびその外側にかけて、径8～50cm程の礫が2～3段に乱雜ではあるが重なって確認され、閉塞石と判断した。隙間には土・遺物が多量に入っていることより、追葬・盗掘により複数回の石の移動が考えられる。

石室入口部より南側は、扇状に礫の分布が広がり、特に敷石されたものではなく、これらも閉塞石の散乱と考えられる。

3. 前庭部

石室入口部前面の閉塞石扇形散乱範囲が前庭部にあたる。石室入口部から南側は、地形に沿って順次傾斜し、入口部より1～1.5mの位置で南側は水路となり、削平されているために前庭部本来の広さの把握はできなかった。なお、石室入口部から埴丘裾部に散乱する石のうち、列石等区画の存否を注意して作業実施したが確認できず、特別の施設は設されなかつたと判断された。

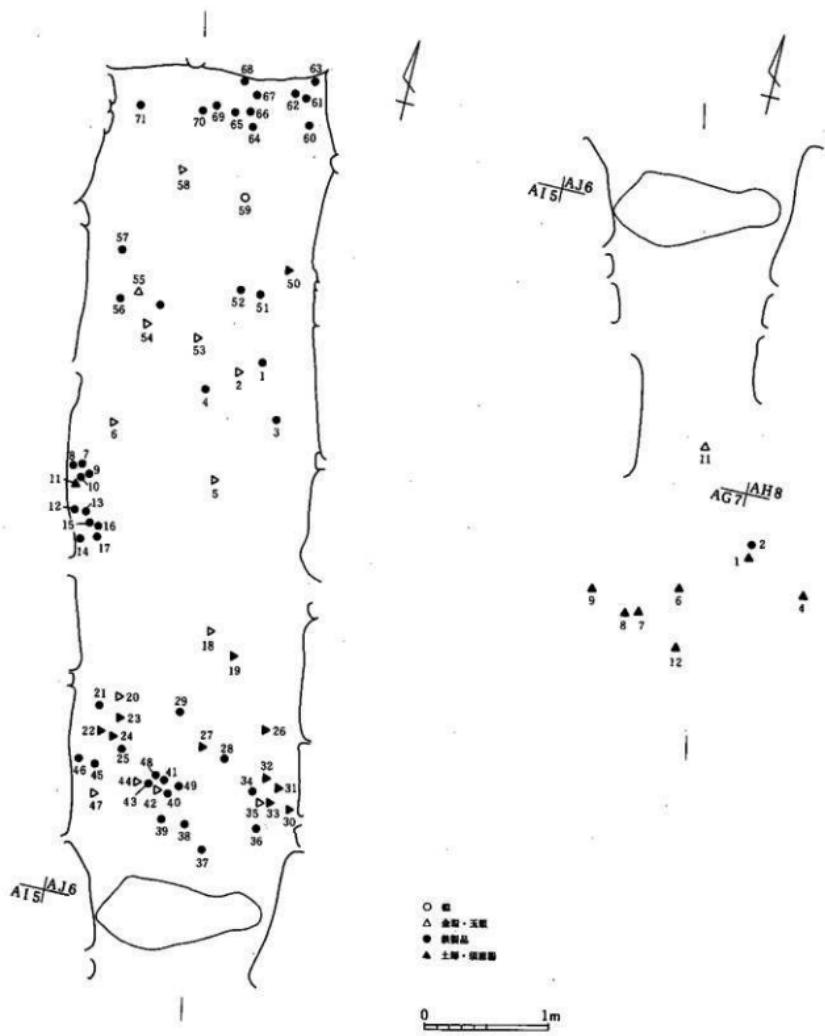
隙間および礫下より土器類が出土した。須恵器が主体で、そのほとんどが羨道部で出土した須恵器と接合する。このことから、追葬もしくは盗掘時に搔き出されたものであるといえる。



挿図8 閉塞石実測図

今回の調査において、前庭部分における墓前祭祀等の痕跡は認められなかった。

なお、奈良平安時代の遺物が混入しており、この時期にも閉塞石の移動・石室内への出入りがあったといえる。



玄室内遺物出土狀況

羨道部および前庭部遺物出土状況

挿図9 遺物出土状況

4. 遺物

1) 鏡

石室内より破損して出土し、紐をはじめ内区の大半を欠くが、文様等の大要は判断不能であり、復元直徑10.0cmを測る乳文鏡である。

内区文様は、残存部で2つの乳があり、径7.5mmを測る。本来は4箇所に存在したと判断される。

乳間に径2.7mmの珠文があり、これも乳間にそれぞれ4個配されたと考えられる。

乳・珠文の外側に、2重の細線による半円弧文を配し、その内側には不鮮明ではあるが、葉文状の線文が施されている。

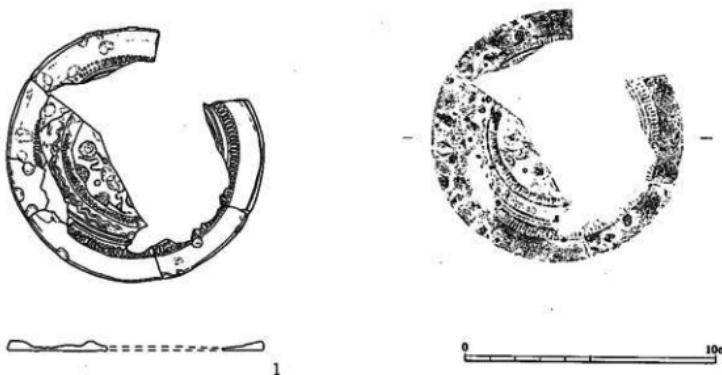
半円弧文の外側は、鋸歯文帯・複波文帯・横線文帯・鋸歯文帯と連続し、外側の鋸歯文帯は、無文縁部との境をなす斜面部分にあたる。

無文縁部は、内側から外縁部に僅かな傾斜をなし、その端部に本鏡の最大厚がある。この傾斜部全体には、線条痕が確認される。

内区の無文部の厚さ2.0mm、線部最大厚2.0mmを測る。

鏡面は、部分的に光沢を残すが、表裏とも銹化が進み、各所で鏽による膨脹があり、文様不明となる部分もある。また、裏面には赤色顔料が残るほか、表裏面とも付着物は認められない。

残存する縁部および文様は、かなり摩滅しており、長期間使用されていたものであるといえる。

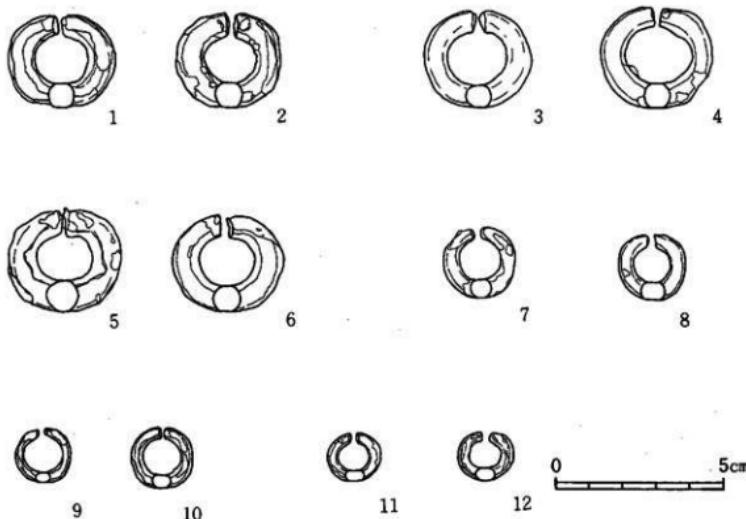


插図10 鏡

2) 金環・銀環

表2 出土金環・銀環観察表

挿図No	製品	出土位置	計測値(現存長・最大値) 長さ/幅/厚さ/抜幅(cm)	特徴等	備考
11-1	銀環	石室7層北端	2.7/3.2/0.7/0.3 21.1	部分的に剥離するも内側の一部に銀が残り、銀輪と判断できる。	大型 この2点が対か
11-2	銀環	石室7層中央東側	2.8/3.2/0.7/0.3 19.6	半分以上が剥離するも部分的に銀が残り、銀環と判断できる。	
11-3	金環	石室2	2.9/3.2/0.7/0.2 19.2	金が比較的多く残る。	大型 この2点が対か
11-4	金環?	閉塞石11	3.0/3.3/0.7/0.3 20.4	部分的に剥離し、金・銀も残っていない。	
11-5	金環?	石室6	3.0/3.4/0.9/0.1 21.6	部分的に剥離し、金・銀も残っていない。抉りがほとんど離れていないことから、長原12号墳や大室25号墳の例のように、直接耳朶に装着したものではない可能性がある。鐵錐は残存していない。	大型 この2点が対か
11-6	金環	石室18	2.9/3.3/0.8/0.2 21.5	部分的に剥離するも、金がわずかに残る。	
11-7	金環?	石室58	2.1/2.1/0.5/0.2 7.6	半分以上が剥離し、金・銀も残っていない。	中型 この2点が対か
11-8	金環	閉塞石間	1.9/2.0/0.5/0.2 9.3	保存状態は良好で、ほぼ全面に金が残る。	
11-9	金環	石室54	1.6/1.7/0.3/0.2 2.7	全体的に剥離するも、わずかに内側に金が残る。ほぼ円形。	小型 この2点が対か
11-10	金環	石室7層中央東側	1.8/1.8/0.4/0.2 2.6	全体的に剥離するも、内側に金が残る。ほぼ円形。	
11-11	金環	石室53	1.5/1.6/0.3/0.2 3.9	保存状態は良好で、ほぼ全面に金が残る。	小型 この2点が対か
11-12	金環	石室7層北西端	1.6/1.7/0.4/0.2 3.6	保存状態は良好で、2/3ほど金が残る。	

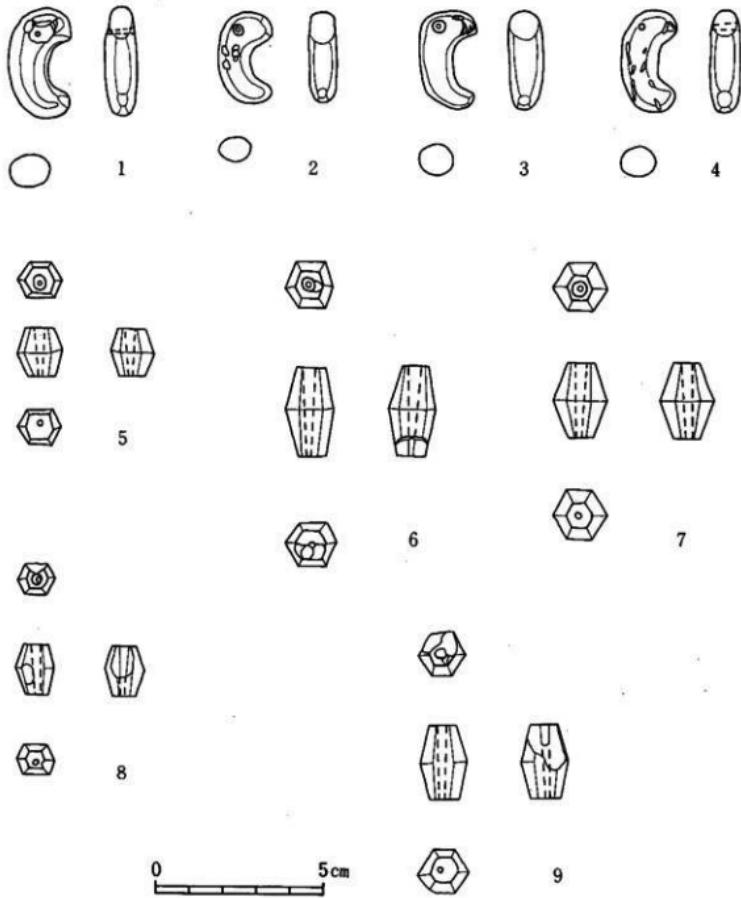


挿図11 出土金環・銀環

3) 勾玉・切子玉・小玉

表3 勾玉・切子玉・小玉計測値

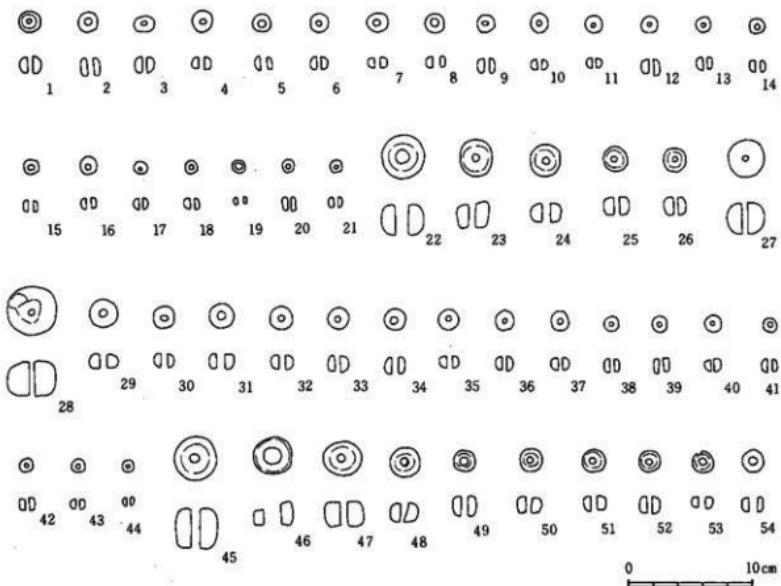
擲出No	出土位置	長さ(mm)	直径(mm)	孔径上/下(mm)	重さ(g)	色調	備考
勾玉							
12-1	石室 20	32.5	12.0	3.5 / 1.5	7.0	ピーコックグリーン	水晶製
12-2	石室 44	27.0	9.5	2.5 / 1.0	4.7	雌 黄	瑪瑙製
12-3	石室 47	29.0	10.0	3.0 / 1.5	5.8	クロムグリーン	瑪瑙製
12-4	石室7層南東端	30.0	10.5	2.5 / 1.5	5.4	無色透明	水晶製
切子玉							
12-5	石室 35	14.5	13.2	2.9 / 1.0	2.8	無色透明	水晶製
12-6	石室 42	26.8	15.0	4.0 / 1.2	6.8	無色透明	水晶製
12-7	石室7層南東端	22.5	16.3	4.0 / 2.3	6.3	無色透明	水晶製
12-8	石室7層南東端	15.3	11.4	2.8 / 1.5	2.1	無色透明	水晶製
12-9	石室7層南西端	22.2	14.3	2.8 / 1.5	5.3	無色透明	水晶製
小玉							
13-1	石室 5	6.0	7.8	2.5 / 2.3	0.7	マリンブルー	ガラス製 丸玉状
13-2	石室 55	3.8	4.0	1.5 / 1.5	0.1	空 色	ガラス製
13-3	石室7層北端	3.3	4.0	1.0 / 1.0	0.05	モスグレー	ガラス製
13-4	石室7層北端	3.0	4.0	1.0 / 1.0	0.06	モスグレー	ガラス製
13-5	石室7層北端	2.1	4.0	1.0 / 1.0	0.07	マリンブルー	ガラス製
13-6	石室7層北端	2.0	4.0	1.3 / 1.3	0.03	ジェイブルー	ガラス製
13-7	石室7層北端	2.0	4.0	1.5 / 1.5	0.03	ジェイブルー	ガラス製
13-8	石室7層北端	2.0	4.0	1.3 / 1.3	0.03	ジェイブルー	ガラス製
13-9	石室7層北端	3.0	3.5	1.0 / 1.0	0.05	青 丹	ガラス製
13-10	石室7層北端	2.5	3.5	1.0 / 1.0	0.07	デルフトブルー	ガラス製
13-11	石室7層北端	2.0	3.5	1.0 / 1.0	0.04	青 丹	ガラス製
13-12	石室7層北端	3.0	3.0	1.0 / 1.0	0.03	白 群	ガラス製
13-13	石室7層北端	2.2	3.0	1.0 / 1.0	0.03	ジェイブルー	ガラス製
13-14	石室7層北端	2.1	3.0	1.0 / 1.0	0.03	ジェイブルー	ガラス製
13-15	石室7層北端	2.1	3.0	1.0 / 1.0	0.03	ジェイブルー	ガラス製
13-16	石室7層北端	2.0	3.0	1.0 / 1.0	0.05	フリント	ガラス製
13-17	石室7層北端	2.2	3.0	1.0 / 1.0	0.02	マリンブルー	ガラス製
13-18	石室7層北端	2.1	2.8	1.0 / 1.0	0.02	マリンブルー	ガラス製
13-19	石室7層北端	1.2	2.8	1.0 / 1.0	0.03	フリント	ガラス製
13-20	石室7層北端	2.5	2.8	1.0 / 1.0	0.03	空 色	ガラス製
13-21	石室7層北端	2.0	2.5	1.0 / 1.0	0.03	白 群	ガラス製



插図12 勾玉・切子玉

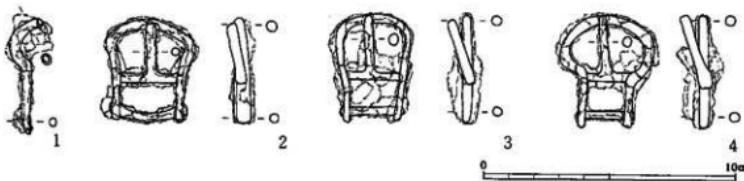
表4 小玉計測値

探査No	出土位置	長さ(mm)	直径(mm)	孔径上/下(mm)	重さ(g)	色調	備考
小玉							
13-22	石室7層北西側	6.5	8.2	3.0 / 3.0	0.6	マリンブルー	ガラス製
13-23	石室7層北西側	5.0	7.0	1.2 / 1.2	0.4	マリンブルー	ガラス製
13-24	石室7層北西側	3.3	6.0	2.0 / 2.0	0.2	マリンブルー	ガラス製
13-25	石室7層北西側	3.8	4.5	1.0 / 1.0	0.1	マリンブルー	ガラス製
13-26	石室7層北西側	3.0	4.5	1.0 / 1.0	0.08	マリンブルー	ガラス製
13-27	石室7層中央東側	6.5	7.0	1.0 / 1.0	0.3	フリント	材質不明 丸玉状
13-28	石室7層南西側	7.0	10.0	1.5 / 1.2	1.0	レモンイエロー	ガラス製
13-29	石室7層南西側	3.0	5.3	1.0 / 1.0	0.1	マリンブルー	ガラス製
13-30	石室7層南西側	2.5	4.2	1.5 / 1.0	0.1	デルフトブルー	ガラス製
13-31	石室7層南端	3.0	5.0	2.0 / 2.0	0.1	マリンブルー	ガラス製
13-32	石室7層南端	2.8	4.8	1.0 / 1.0	0.06	マリンブルー	ガラス製
13-33	石室7層南端	3.3	4.5	1.0 / 1.0	0.06	デルフトブルー	ガラス製
13-34	石室7層南端	3.0	4.2	1.5 / 1.0	0.06	フリント	ガラス製
13-35	石室7層南端	2.8	4.0	1.0 / 1.0	0.05	マリンブルー	ガラス製
13-36	石室7層南端	2.8	3.5	1.0 / 1.0	0.05	フリント	ガラス製
13-37	石室7層南端	2.2	3.5	1.0 / 1.0	0.03	シダーグリーン	ガラス製
13-38	石室7層南端	3.1	3.0	1.0 / 1.0	0.03	深緑	ガラス製
13-39	石室7層南端	2.3	3.0	1.0 / 1.0	0.03	鉛色	ガラス製
13-40	石室7層南端	2.2	3.0	1.0 / 1.0	0.03	ライムグリーン	ガラス製
13-41	石室7層南端	2.0	3.0	1.0 / 1.0	0.02	深緑	ガラス製
13-42	石室7層南端	2.2	2.8	1.0 / 1.0	0.02	マリンブルー	ガラス製
13-43	石室7層南端	2.5	2.5	1.0 / 1.0	0.03	空色	ガラス製
13-44	石室7層南端	1.5	2.3	1.0 / 1.0	0.01	マリンブルー	ガラス製
13-45	閉塞石間	7.5	8.2	2.2 / 2.0	0.7	ボトルグリーン	材質不明 丸玉状
13-46	閉塞石間	5.0	8.0	3.8 / 3.2	0.4	マリンブルー	ガラス製
13-47	閉塞石間	5.8	7.5	1.0 / 1.0	0.4	マリンブルー	ガラス製
13-48	閉塞石間	3.5	5.5	2.0 / 1.0	0.2	マリンブルー	ガラス製
13-49	閉塞石間	3.5	4.5	1.2 / 1.0	0.1	マリンブルー	ガラス製
13-50	閉塞石間	3.0	4.5	1.0 / 1.0	0.2	マリンブルー	ガラス製
13-51	閉塞石間	3.0	4.5	0.8 / 0.8	0.1	マリンブルー	ガラス製
13-52	閉塞石間	3.0	4.3	1.0 / 0.8	0.1	マリンブルー	ガラス製
13-53	閉塞石間	2.0	4.2	1.0 / 1.0	0.1	マリンブルー	ガラス製
13-54	閉塞石間	3.0	4.0	1.0 / 1.0	0.1	マリンブルー	ガラス製
							特にガラス製小玉の破片が3点ある



挿図13 小 玉

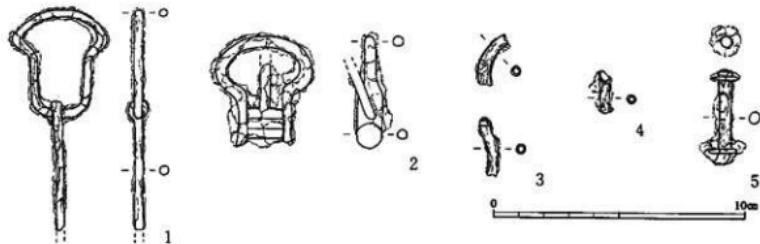
4) 馬 具



挿図14 馬 具

表5 馬具観察表

挿図No	製品	出土位置	計測値(現存長・最大値) (長さ/幅/厚さ) cm	特徴等	備考
14-1	鉗具	石室 29	8.7 / / 1.7	全体の半分と刺金を欠く。	石室46と同型か
14-2	鉗具	石室 38	6.1 / 5.4 / 1.2	T字型の刺金を取り付け、下端部に帶固定部がある。	
14-3	鉗具	石室 39	6.5 / 4.9 / 1.4	T字型の刺金を取り付け、下端部に帶固定部がある。	
14-4	鉗具	石室 40	6.7 / 5.6 / 1.1	刺金・帶固定部は石室38等と同じだが頭部が円形に近い。	石室46と同型か
15-1	鉗具	石室 46	6.2 / 5.9 / 0.7	駒に付けられた皮紐と鍼を連結する部に付けたもの。	
15-2	鉗具	石室 48	7.6 / 5.8 / 1.5	T字型の刺金・帶固定部を設けていると思われる。	鍼が多く正確に分からず
15-3	鉗具?	石室 49	6.5 / / 0.7	鉗具の一部と思われるもの 2点残る。	
15-4	鉗具?		2.4 / / 0.7	鉗具の一部と思われるもの 1点残る。	
15-5	留金具	石室 41	1.8 / 5.7 / 1.5	座金具は、丸か花形か形態は不明。	鍼が多く付着する
16-1	轡	石室 34	環体の長径 約 6.3 短径 約 4.9 引手の長さ 約 13.8 銜の長さ 約 8.5	鉄製素環鏡板付轡 二連銜で、銜の輪の向きを同じにしているものと約90°の角度で曲げているものを連結させている。引手先の輪は両方とも約45°の角度で外側に曲げており、銜と引手が連結している。	一方の引手先輪の半分と、銜と銜との連結部の輪の一部を欠く。鍼が多く付着する。
16-2	轡	石室 46	環体の長径 5.9 短径 4.7 銜の長さ 7.7 立間長径 3.5 短径 2.5 一方の立間長径 2.8 短径 2.3	鉄製素環鏡板付轡で立間が鉗具状になる二連銜で、銜の輪の向きを同じにしているものと約90°の角度で曲げているものを連結させる。引手先の輪は両方とも約45°の角度で外側に曲げて、銜と引手が連結する。鏡板に楕円形鉗具付の立間を付着。	一方の立間の鉗金と、鏡金の一部を欠く以外はすべて残る。鍼が多く付着する。



挿図15 馬具

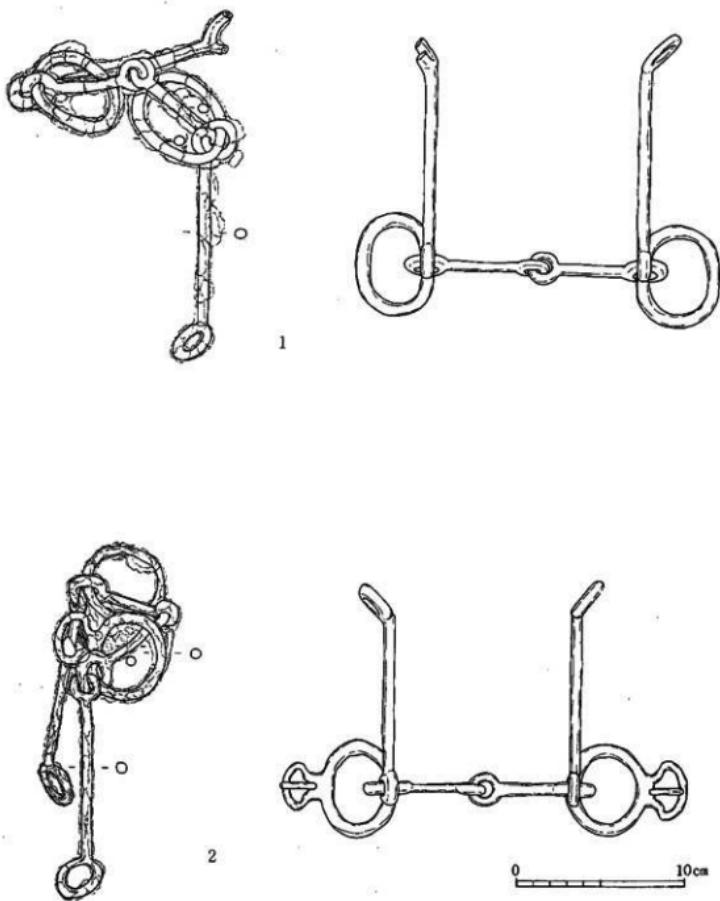


插圖16 馬 具 (唐)

5) 鉄 緑

表 6 鉄緑觀察表

挿図No	製 品	出土位置	計測値(現存長・最大幅) (長さ/幅/厚さ) cm	特 微 等	備 考
17-1	鉄 緑	石 室 3	3.4 / 0.7 / 0.4	両刃の長頸緑 頸部・茎の一部欠く	
17-2	鉄 緑		3.3 / 0.6 / 0.5	長頸緑 茎の一部が残るのみ	
17-3	鉄 緑	石 室 4	6.3 / 1.5 / 0.6	緑身部と頭の一部が残る	
17-4	鉄 緑	石 室 7	10.9 / 0.8 / 0.5	両刃の長頸緑 緑身部の半分・頭部の一部が残る	
17-5	鉄 緑	石 室 8	9.7 / 0.6 / 0.5	長頸緑 頸と茎の一部が残る	関部あり
17-6	鉄 緑	石 室 9	6.5 / 0.6 / 0.5	長頸緑 茎のみ残る	関部あり
17-7	鉄 緑	石 室 10	4.5 / 0.5 / 0.5	長頸緑 茎の一部が残るのみ	関部あり
17-8	鉄 緑	石 室 11	3.9 / 0.3 / 0.3	長頸緑 茎のみ残る	
17-9	鉄 緑		2.9 / 0.3 / 0.3	長頸緑 茎のみ残る	
17-10	鉄 緑	石 室 12	15.7 / 0.9 / 0.5	両刃の長頸緑 茎の先端を欠く	
17-11	鉄 緑		17.7 / 1.3 / 0.5	長頸緑 茎の先端を欠く	木質が残る
17-12	鉄 緑		12.0 / 0.8 / 0.6	片刃の長頸緑 茎を欠く	
17-13	鉄 緑		13.3 / 0.9 / 0.5	両刃の長頸緑 緑身部先端と茎欠く	
17-14	鉄 緑		13.0 / 0.9 / 0.4	両刃の長頸緑 緑身部先端と茎欠く	
17-15	鉄 緑		10.5 / 0.8 / 0.5	両刃の長頸緑 茎を欠く	
17-16	鉄 緑		4.5 / 1.4 / 0.3	茎の一部が残る	
17-17	鉄 緑	石 室 13	13.9 / 0.8 / 0.4	片刃の長頸緑 茎の一部を欠く	関部あり
17-18	鉄 緑	石 室 14	16.3 / 0.9 / 0.5	両刃の長頸緑 茎の先端を欠く	関部あり
17-19	鉄 緑	石 室 15	21.0 / 0.8 / 0.5	両刃の長頸緑 茎の先端を欠く	関部あり
17-20	鉄 緑	石 室 16	15.8 / 0.9 / 0.5	両刃の長頸緑 茎の先端を欠く	
17-21	鉄 緑		11.9 / 0.9 / 0.6	両刃の長頸緑 茎を欠く	関部あり
17-22	鉄 緑	石 室 17	5.1 / 0.4 / 0.4	長頸緑 頸部のみ残る	
17-23	鉄 緑	石 室 21	4.4 / 0.6 / 0.3	長頸緑 茎が残るのみ	
17-24	鉄 緑	石 室 25	5.0 / 0.6 / 0.6	長頸緑 頸部と茎の一部が残る	関部あり
17-25	鉄 緑		5.8 / 0.5 / 0.3	長頸緑 頸部のみ残る	
17-26	鉄 緑	石 室 28	5.4 / 1.1 / 0.4	片刃の長頸緑 緑身部のみ残る	
17-27	鉄 緑	石 室 51	7.6 / 0.8 / 0.5	長頸緑 緑身部から頸部にかけ残る	
17-28	鉄 緑	石 室 52	6.4 / 0.5 / 0.5	長頸緑 頸部と茎が残る	関部あり
18-1	鉄 緑		5.4 / 0.4 / 0.4	長頸緑 頸部のみ残る	関部あり
18-2	鉄 緑		4.5 / 0.5 / 0.4	長頸緑 頸部のみ残る	
18-3	鉄 緑	石 室 56	2.9 / 2.4 / 0.3	緑身部先端と逆刺端部の一方を欠く	
18-4	鉄 緑	石 室 57	4.4 / 0.5 / 0.4	片刃の長頸緑 茎のみ残る	

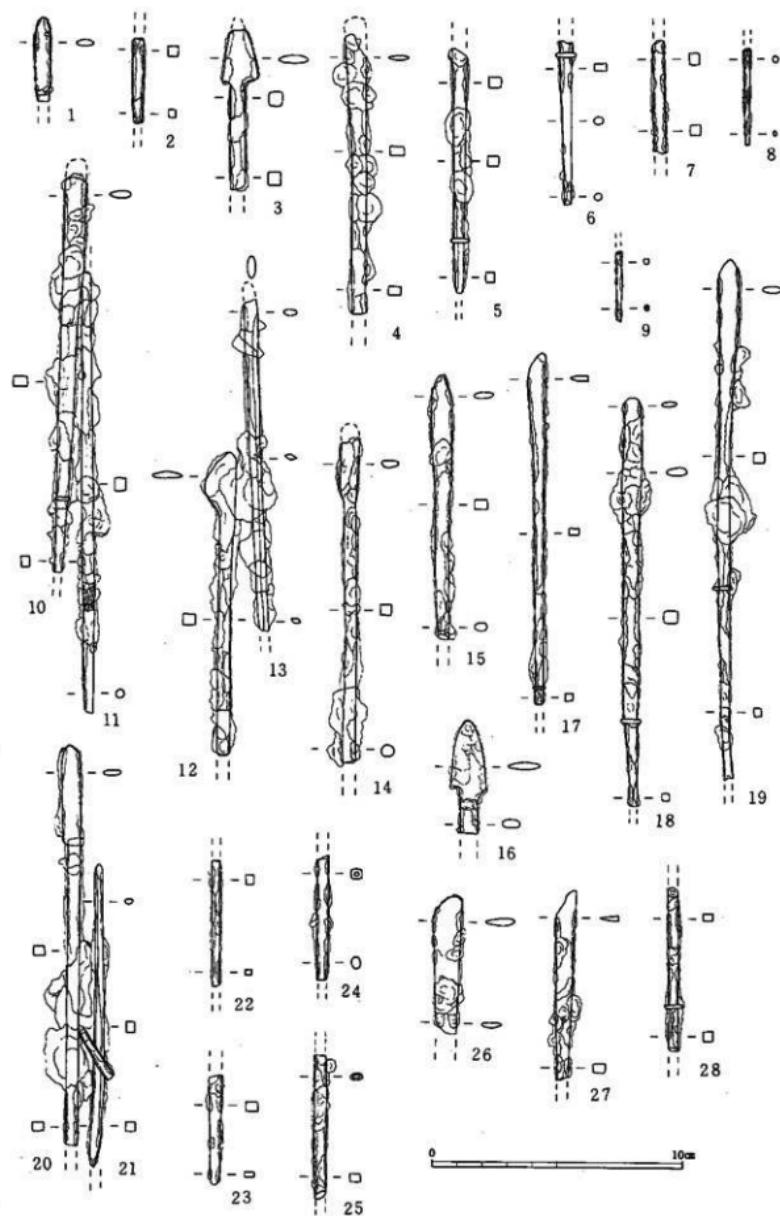
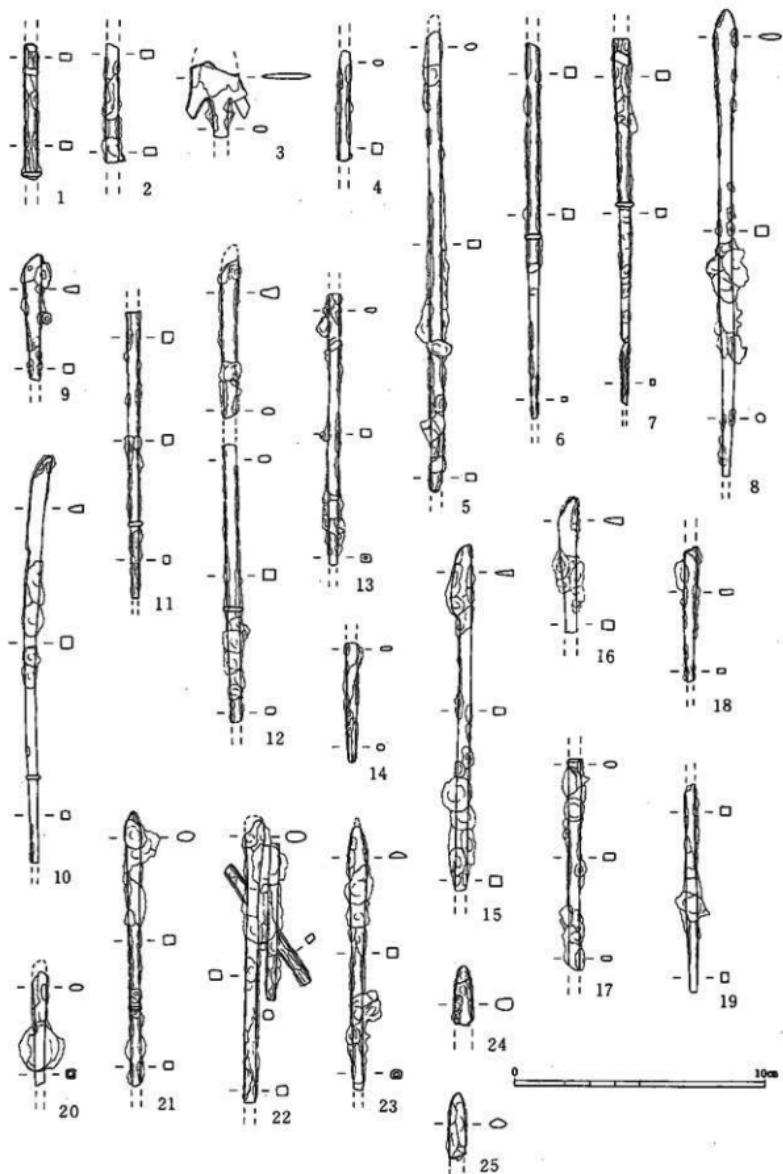


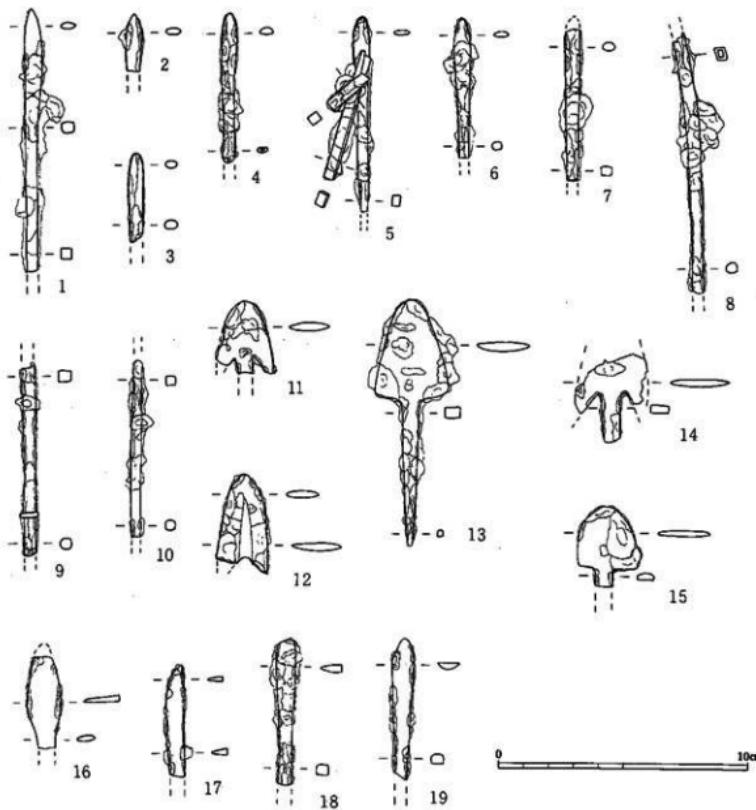
図17 鉄 織

表7 鉄鎌観察表

押出No	製品	出土位置	計測値(現存長・最大幅) (長さ/幅/厚さ) cm	特徴等	備考
18-5	鉄鎌	石室 60	18.3 / 0.6 / 0.5	長頭鎌 鎌身部先端と茎の一部欠く	
18-6	鉄鎌		14.8 / 0.6 / 0.4	長頭鎌 鎌身部と茎の一部を欠く	関部あり
18-7	鉄鎌		14.4 / 0.7 / 0.5	長頭鎌 鎌身部と茎の一部を欠く	関部あり
18-8	鉄鎌	石室 61	18.4 / 0.9 / 0.5	両刃の長頭鎌 茎の一部を欠く	
18-9	鉄鎌		5.0 / 0.7 / 0.4	片刃の長頭鎌 鎌身部と頭部の一部が残る	
18-10	鉄鎌	石室 62	16.3 / 0.8 / 0.3	片刃の長頭鎌 茎の先端を欠く	関部あり
18-11	鉄鎌		11.3 / 0.5 / 0.5	長頭鎌 鎌身部と茎の先端を欠く	関部あり
18-12	鉄鎌	石室 63	18.1 / 0.9 / 0.4	片刃の長頭鎌 鎌身部と茎の先端欠	関部あり
18-13	鉄鎌	石室 65	10.8 / 0.5 / 0.3	長頭鎌 頭部から茎にかけて残る	
18-14	鉄鎌	石室 66	4.9 / 0.8 / 0.4	長頭鎌 茎のみ残る	他に2片あり
18-15	鉄鎌	石室 67	13.9 / 1.1 / 0.4	片刃の長頭鎌 茎を欠く	他に2片あり
18-16	鉄鎌		5.4 / 0.9 / 0.6	片刃の長頭鎌 頭部から茎を欠く	他に2片あり
18-17	鉄鎌		8.4 / 0.6 / 0.2	長頭鎌 鎌身部と茎を欠く	
18-18	鉄鎌	石室 68	5.5 / 0.5 / 0.3	長頭鎌 茎の一部が残るのみ	
18-19	鉄鎌	石室 69	8.3 / 0.4 / 0.4	長頭鎌 頭部と茎のみ残る	
18-20	鉄鎌	石室 70	4.4 / 0.7 / 0.4	両刃の長頭鎌 鎌身部先端と茎を欠	他に2片あり
18-21	鉄鎌	石室 71	10.9 / 0.6 / 0.4	片刃の長頭鎌 茎を欠く	他に2片あり
18-22	鉄鎌		11.3 / 1.1 / 0.4	両刃の長頭鎌 鎌身部先端と茎を欠	"
18-23	鉄鎌		10.5 / 0.7 / 0.5	長頭鎌 茎を欠く	"
18-24	鉄鎌		2.3 / 0.7 / 0.4	両刃の長頭鎌 鎌身部のみ残る	"
18-25	鉄鎌		2.5 / 0.7 / 0.3	両刃の長頭鎌 鎌身部のみ残る	"
19-1	鉄鎌		10.4 / 0.8 / 0.5	両刃の長頭鎌 茎を欠く	"
19-2	鉄鎌		2.2 / 0.8 / 0.4	両刃の長頭鎌 鎌身部のみ残る	"
19-3	鉄鎌		3.5 / 0.7 / 0.4	両刃の長頭鎌 鎌身部のみ残る	"
19-4	鉄鎌		5.8 / 0.7 / 0.4	両刃の長頭鎌 頭部一部と茎を欠く	
19-5	鉄鎌		7.8 / 0.7 / 0.4	両刃の長頭鎌 頭部一部と茎を欠く	
19-6	鉄鎌		5.5 / 0.7 / 0.4	両刃の長頭鎌 頭部一部と茎を欠く	
19-7	鉄鎌		5.9 / 0.7 / 0.4	両刃の長頭鎌 鎌身部先端と頭の一部・茎を欠く	
19-8	鉄鎌		10.4 / 0.4 / 0.4	長頭鎌 鎌身部と茎を欠く	
19-9	鉄鎌		7.5 / 0.6 / 0.4	長頭鎌 鎌身部と茎を欠く	関部あり
19-10	鉄鎌		7.0 / 0.5 / 0.5	長頭鎌 鎌身部と茎を欠く	
19-11	鉄鎌	石室7層北端	3.0 / 2.3 / 0.3	片刃の逆刺端部・茎を欠く	他に2片あり
19-12	鉄鎌		3.7 / 2.3 / 0.5	片刃の逆刺端部を欠く	"



插図18 鉄 繖



插図19 鉄 磁

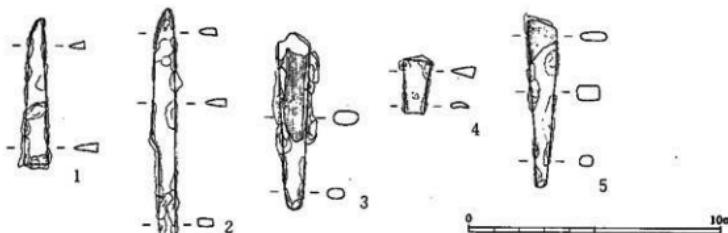
表8 鉄鎌観察表

挿図No	製品	出土位置	計測値(現存長・最大幅) (長さ/幅/厚さ) cm	特徴等	備考
19-13	鉄鎌	閉塞石2	9.8 / 2.9 / 0.6	完形	
19-14	鉄鎌	閉塞石間	3.5 / 3.0 / 0.4	鎌身部先端と逆刃端部の一部を欠く	頭に刃跡有る
19-15	鉄鎌		3.1 / 2.6 / 0.4	鎌身部の一部と頸より下を欠く	"
19-16	鉄鎌		3.6 / 1.4 / 0.4	鎌身部の先端と頸より下を欠く	"
19-17	鉄鎌		4.4 / 0.7 / 0.3	片刃の長頸鎌 頸部より下を欠く	"
19-18	鉄鎌		5.7 / 1.0 / 0.5	両刃の長頸鎌 頸部より下を欠く	"
19-19	鉄鎌		5.6 / 0.9 / 0.6	長頸鎌 頸部より下を欠く	頭に刃跡有る

6) 刀子

表9 刀子観察表

挿図No	製品	出土位置	計測値(現存長・最大幅) (長さ/幅/厚さ) cm	特徴等	備考
20-1	刀子	石室36	5.9 / 1.1 / 0.3	刃部のみ残る	
20-2	刀子	石室37	9.2 / 1.1 / 0.5	頸部の一部と茎を欠く	
20-3	刀子	石室45	7.1 / 1.3 / 0.4	刃部の先端が残る	木質残る
20-4	刀子		2.3 / 1.4 / 0.9	茎の一部のみ残る	
20-5	刀子	石室7壁北端	6.8 / 1.2 / 0.5	刃部を欠く	木質残る

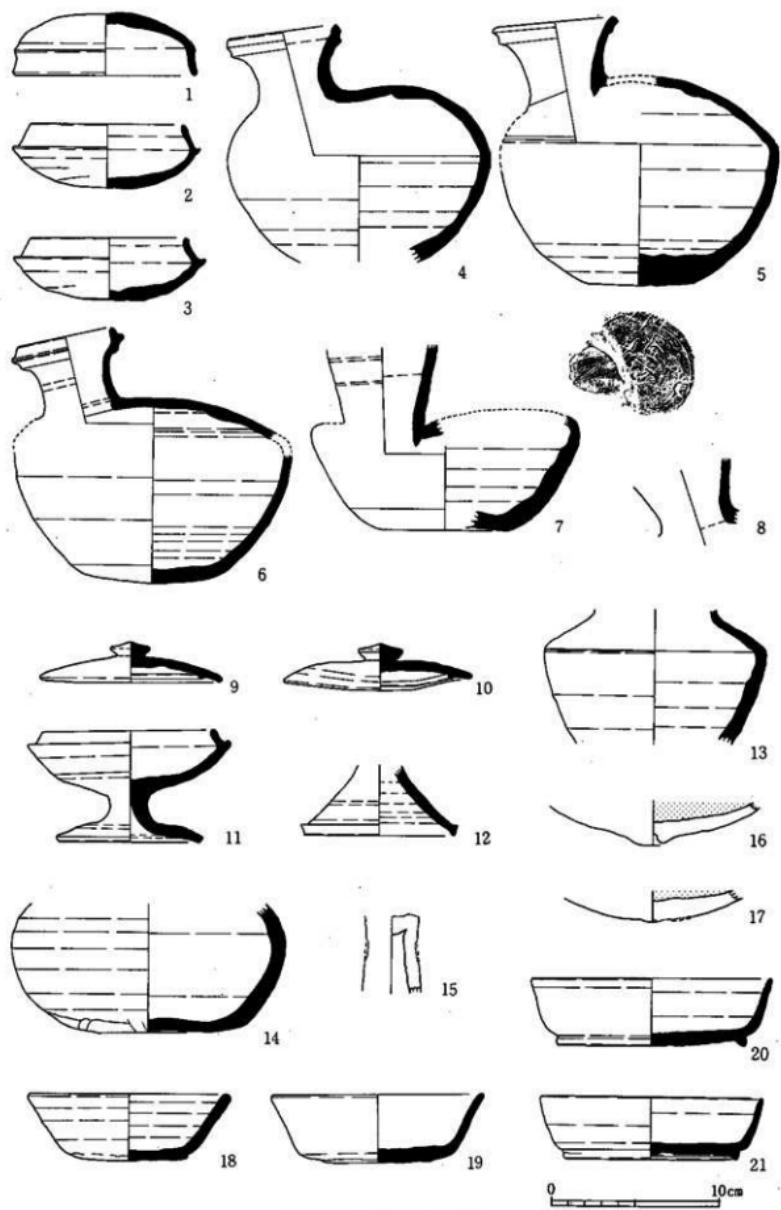


挿図20 刀子

7) 土師器・須恵器

表10 土師器・須恵器

坪図No	器種	出土位置	計測値(cm) (推定)	特徴	時期	備考
21-1	蓋坏 蓋	石室 32	口径 10.7 器高 3.7	須恵器 内外共にロクロナデ 灰色 №1と2は組となる	6世紀後半	自然釉 この2個体は組となる
21-2	蓋坏 坏	石室 31	底径 3.6 器高 3.8	須恵器 外はロクロナデ・底部はロク ロヘラケズリ、内はロクロナデ 灰色	6世紀後半	
21-3	蓋坏 坏	石室 33	底径 3.7 器高 3.7	須恵器 外はロクロナデ・底部はロク ロヘラケズリ、内はロクロナデ 灰色	6世紀後半	
21-4	平 瓶	閉塞石 9	口径 6.5 開口部直径 15.7 残高 14.7	須恵器 内外共にロクロナデ 薄い灰色	7世紀後半	胴から底にかけての1/3を欠く
21-5	平 瓶	閉塞石下	口径 7.0 開口部直径 16.6 残高 (15.9)	須恵器 外はロクロナデ・底部は ロクロヘラケズリ、内はロクロナデ 薄い灰色	7世紀後半	頸と胴の接合部 付近を欠く 自然釉
21-6	平 瓶	閉塞石下	口径 5.8 開口部直径 (16.6) 器高 (15.3)	須恵器 外はロクロナデ・底部は ロクロヘラケズリ、内はロクロナデ 薄い灰色	7世紀後半	胴部を1/5欠く
21-7	平 瓶	閉塞石 4	開口部直径 (16.1) 残高 (11.0)	須恵器 内外共にロクロナデ・底 部はロクロヘラケズリ、黄みの灰色	7世紀後半	頭の3/4と胴の 1/3を欠く
21-8	平 瓶	閉塞石 7 8 + 12	残高 3.9	須恵器 内外共にロクロナデ 濃い灰色	7世紀後半	頸と胴の1/4を 欠く
21-9	蓋坏 蓋	石室 26 30	口径 11.1 器高 2.4	須恵器 内外共にロクロナデ 灰色	7世紀後半	黒みの強い自然釉
21-10	蓋坏 蓋	石室 27	口径 11.5 器高 2.7	須恵器 内外共にロクロナデ 灰色	7世紀後半	黒みの強い自然釉
21-11	有蓋高坏	閉塞石 6	口径 10.2 底径 8.4 器高 6.7	須恵器 内外共にロクロナデ 坏部の内もロクロナデ 黄みの灰色	7世紀後半	
21-12	高 坏	閉塞石下	底径 9.0 残高 4.2	須恵器 内外共にロクロナデ 黄みの灰色	7世紀後半	胴部が1/4残る



挿図21 土師器・須恵器

表11 土師器・須恵器

掲図No	器種	出土位置	計測値(cm) (推定)	特徴	時期	備考
21-13	短頸壺	閉塞石下 1	肩幅大径(13.3) 残高 8.1	須恵器 内外共にロクロナデ 薄い灰色	7世紀後半	脚部の1/3が残る
21-14	平瓶	閉塞石下	肩幅大径 16.5 底径 6.5 残高 7.7	須恵器 内外共にロクロナデ 底部はヘラケズリ 灰色	7世紀後半	底部と、脚部の 1/4が残る
21-15	高坏	閉塞石下	残高 4.7	土師器 外はヘラミガキ、内はヘラケズリ 赤みの黄色	7世紀後半	脚部のみ残る
21-16	高坏	閉塞石下	残高 2.6	土師器 外はナデ・内はヘラミガキ 明るい灰黄 内面黒色	7世紀後半	坏底部のみ残る
21-17	高坏	閉塞石下	残高 1.8	土師器 外はナデ・内はヘラミガキ 赤みの黄色 内面黒色	7世紀後半	坏底部のみ残る
21-18	坏	石室 11	口径 11.8 底径 6.3 器高 3.9	須恵器 内外共にロクロナデ 底部は回転ヘラケズリ 薄い灰色	8世紀前半	
21-19	坏	石室 24	口径 12.5 底径 6.4 器高 4.1	須恵器 内外共にロクロナデ 底部は回転ヘラケズリ 黄みの灰色	8世紀前半	
21-20	坏	石室 22	口径 14.3 底径 11.3 器高 4.0	須恵器 内外共にロクロナデ 底部は回転ヘラケズリ 灰色	8世紀前半	
21-21	坏	石室 23	口径 13.1 底径 10.3 器高 3.9	須恵器 内外共にロクロナデ 底部は回転ヘラケズリ 黄みの灰色	8世紀前半	

第V章 まとめ

今回の調査により、本古墳の姿をかなり具体的に把握することができたといえる。しかし、本文中で記したとおり、古墳全体としては破壊がかなり進んでおり、本来の姿を確認できない部分も少なからずあることも事実である。

本調査により、知り得た事実のいくつかの整理を行ない、それから派生する問題点を提起して本書のまとめとしたい。

・石室構造等について

本墳の、横穴式石室を構築する石材の供給源は、近接する土曾川流域の近在において確保している。このことは、当方古墳のいずれもが、近在の天竜川支流域で石材を確保することに共通し、それは、築墓集団の生活領域内で行なわれることを原則としている。

石室構築については、裏込部分の観察が十分に行なえない制約もあり、内面状況の観察によるほかないが、壁面の構成から、構築法を以下のように判断した。

まず一段目は、奥壁・側壁ともに壁面を垂直に、上部高を揃えて基盤面に据え、石室の平面形を規定している。

二段目も、上部高の揃う石材を用い、一段目の上に順次積み上げられ、三段目ともに連続する状況が確認された。

三段目から上の壁面は、左右両壁の形状が異なっている。左壁は下二段と異なり、ほぼ二段分の高さを大小の石材による組み合わせで、みかけ上一段で積み上げている。一方右壁は、下二段と同様に三段目・四段目と積み上げている。なお奥壁については、右側上部が崩落しているため、左右いずれの壁の構築法であったかの判断はできない。

左右両壁の上部石積みについては、どちらを基準（先行）としているか決し難いが、2つの考え方を示しうる。

一つは、右壁を先行するもので、下二段同様に三段目・四段目を積み上げ、天井石構架高を整えるもので、左壁高は右壁高に合わせて調達し得た石材を、一括して積み上げたとするものである。

二つは、前者と逆に左壁側の二段目より上を、当初から調達用材の大小を組み合わせながら、一段で積み上げ天井高を整え、その高さに右壁を一致させるように、三段目・四段目と順次積み上げたとするものである。

奥壁の全容把握が不可能なこと、裏込状態未確認であることなど、最終的な判断は困難であるが、より規格性が高い右壁の構築によって、本石室高は決定された可能性が高いことを指摘するにとどめざるをえない。

平面形については、当方に普遍的に見られる無袖式石室の現存する大半が、入口部に閉塞石および土砂堆積があり、入口部平面形の判断ができず、本墳に認められた玄室と羨道の区別が、同類古墳のかなりのものにもあることが推測され、今後の調査・研究に大きな指針を示す結果を得ることができた。

・出土遺物について

石室の内外から、土器・鏡・装身具・馬具が出土し、いずれも本墳の一次葬から後、次の追葬者に関する副葬品といえるものである。

まず出土した土器は須恵器が主体で、壺・高壺・平瓶など、当地方同類古墳のものとの差異は認められないが、量的には若干少ないと見える。

須恵器形態から時期を判断すると、6世紀後半を始めとし、7世紀全般にわたり、一部8世紀初頭に属する可能性のものもある。その期間については、100年を越える間、墓として機能したものといえる。

装身具類のうち、金環10点・銀環2点の出土は、単純計算で一人一対を所有するとして、最低6人の人物がこの石室内に葬られたことを示している。

複数人の埋葬の事実は、本墳が特定集団の家族墓的な性格をもって、一定期間存在したといえ、須恵器の内容とも一致する。

武器として鉄鎌が70余本あり、破損品もかなりの量があり、本来の数は不明である。これもすべてが同時期の副葬品ではなく、他の品々同様、何回かの追葬の副葬品といえる。

なお、当該期当地方同類古墳に通例見られる鉄刀類の出土は、その破片も含め皆無である。本来副葬されていたものが、盗掘等により欠落したが、当初から副葬されなかったかの判断はできない。当地方で石室内出土遺物の明らかな古墳のうち、下伊那郡豊丘村家の上古墳でも鉄刀類の出土がなく、鉄刀を出土しないことが何を意味するのか、今後の検討課題である。

副葬品の内容から、複数の埋葬がなされたことは疑う余地はないが、副葬品のうち唯一の鏡鑑の出土も特徴的であり、どの段階で埋葬された人物に副葬されたかは不明であるが、100余年間を一族の墓とした集団の中で、何らかの意味を持つ品と考えられる。

また、2点の轡とそれに関連する鉢具が出土しているが、追葬数に比べると馬具の副葬は、その数から、特定の時期に限られていたことも考えられる。轡は、鉄製環状の鏡板によるきわめて簡素なものと、鉢具状の立體があるものとが出土しており、他の付属品は鉢具以外は、辻金具等も皆無であり、実用性の高いもので、本墳にかかる集団の性格を考える材料ともなりうる。

・立地から見た古墳の位置づけ

座光寺地区は、5世紀以降長野県を代表する古墳文化の、中心的な役割を担った地の一つとして知られている。その中で本墳は、周辺的な位置づけのされる古墳の一つといえる。

当地区内における古墳築造の中心域は、北端の南大島川に寄った高岡・新井原の地区であり、それは弥生時代以降の大集落である恒川遺跡群に居住した集団とのかかわりで捉えられる。

一方、本墳の築造された場所は、恒川遺跡群の所在する低位段丘面からは、隔絶されたともいえる土曾川を遙上した谷地内部にあたり、古墳時代の中核をなす中心的な集団との、直接的なかかわりは求め難く、本墳を築造した集団も、またその居住域も周辺的なものといえる。

当地方の古墳文化は、5世紀中頃以降馬生産活動を根幹として、定着・振興したものと捉えられ、その延長線上に6～7世紀の古墳も築造されたといえる。本墳も、そうした一連の地域相の中に位置付くことはいうまでもないが、細部にわたって本墳の性格等を、当地方古墳文化全体像の中に、どのように組み入れるかは、他の古墳の実情が不明なこともあります、具体的にはなしえない現状にある。

当地区内古墳分布の中で、天竜川支流を週上した谷地形内に、6基の古墳が築造されたことから、近在の集落を根幹とした集団によると推測され、その集団は恒川遺跡群の集団に比して、従属的な位置が与えられると考えられる。

以上、石室の構造・出土遺物・背景集団の一端について、若干の整理を行なったが、本墳の性格等を具体的にするには、本墳の単独調査結果のみでは、とうていなしえないものである。

最後に、本墳の当地方全体の古墳文化の中での位置付けの予想を記し、結語としたい。

本墳は6世紀末という、当地方古墳文化の中で、馬産地の地位を中央政権とのかかわりの中で確立させ、さらに発展段階に至った中で、単なる馬産地としてでなく、馬を媒介として、より優位な形で政治機構の中へ組み込まれ、築造された古墳の一つといえる。そして、その築造された位置等から、地域の中心勢力よりは下位集団の奥津城としての役割を果たしたといえ、その集団は馬管理の最下位集団ではなく、中間的な位置の与えられる集団のものと考えられる。

《引用・参考文献》

- 飯田市教育委員会 1986 『恒川遺跡群』
飯田市教育委員会 1988 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』
飯田市教育委員会 1990 『高岡遺跡 -高岡3・4号古墳-』
飯田市教育委員会 1991a 『恒川遺跡群 新屋敷遺跡』
飯田市教育委員会 1991b 『恒川遺跡 田中・倉垣外地籍』
飯田市教育委員会 1991c 『高岡遺跡 -新井原18号古墳-』
飯田市教育委員会 1992a 『北本城々跡』
飯田市教育委員会 1992b 『恒川遺跡群 白山遺跡』
飯田市教育委員会 1993 『恒川遺跡群 恒川A地籍』
飯田市教育委員会 1994 『長野県飯田市代田山狐塚古墳の測量調査』
飯田市教育委員会 1996 『上野遺跡・金井原瓦窯址』
飯田市教育委員会 1997 『大井遺跡 大久保遺跡』
飯田市教育委員会 1982~97 『恒川遺跡群範囲確認調査概報』
今村善興 1967 『飯田市座光寺原遺跡』『長野県考古学会誌』4号
梅棹忠夫・金田一春彦他 1989 『日本語大辞典』講談社
岡田正彦 1986 『飯田市座光寺石行遺跡発掘調査概報』『伊那』34-6
更埴市教育委員会 1992 『史跡 森将軍塚古墳』
座右宝刊行会 『世界陶磁全集2』日本古代
座光寺考古学研究会 1976 『飯田市座光寺中島遺跡の調査報告』『伊那』24-3
座光寺村史刊行委員会 1993 『座光寺村史』
下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史』第二巻
下伊那誌編纂會 1991 『下伊那史』第一巻
豊丘村教育委員会 1966 『家の上古墳』
鳥居龍藏 1924 『下伊那の先史及原史時代』
中村浩 『須恵器集成図録』第一巻近畿編
長野県教育委員会 1971 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-飯田地区-昭和45年度』
長野県埋蔵文化財センター 1991 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3-大室古墳群』
長野県史刊行会 1981 『長野県史 考古資料編 全一巻(一) 遺跡地名表』
長野県史刊行会 1983 『長野県史 考古資料編 全一巻(三) 主要遺跡(南信)』
宮澤恒之 1967 『飯田市中島遺跡』『長野県考古学会誌』4号
宮澤恒之 1953・54 『下伊那郡座光寺村金井原瓦窯址報告』『伊那』1-12、2-2、2-3

写 真 図 版



ナギジリ一号古墳周辺



尾根上部から



石室
調査前



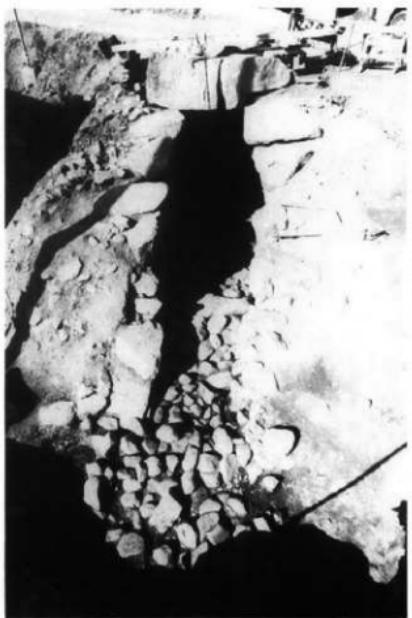
石室
開口部（南より）



同上（東より）



天井石（上部より）





閉塞石



樋石





敷石の状況



側壁の石積（東側）



同上（西側）



遺物出土状況
手前が鏡



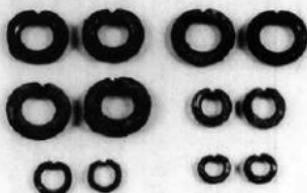
同上
蓋・坏と勾玉



同上
馬具



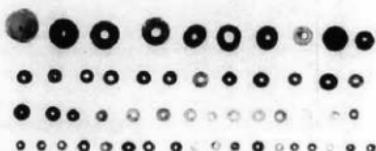
鏡



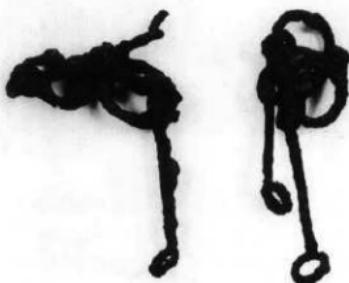
金環・銀環



勾玉・切子玉



小玉



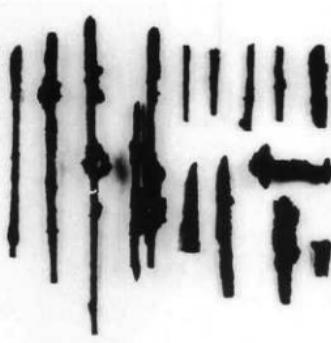
馬具（轡）



馬具（銃具）



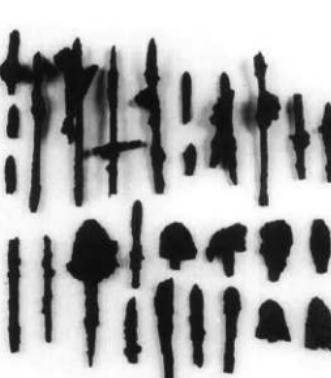
鉄 錆



鉄 錆



鉄 錆

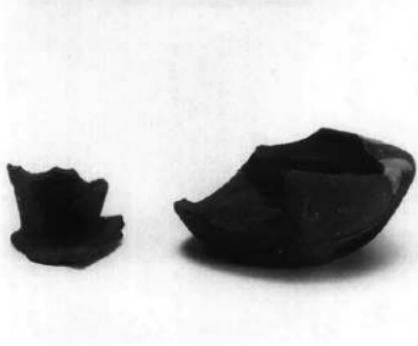


鉄 錆



蓋 坯





平 瓶



有盖高坏



蓋



高 坯



短頸壺



平 瓶



高 坯



坯

報告書抄録

ふりがな	なぎじりいちごうこふん
書名	ナギジリ一號古墳
副書名	
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	小林正春・福澤好晃
編集機関	長野県飯田市教育委員会
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村					
なぎじりいちごうこふん ナギジリ一號古墳	いいだしきこうじ 飯田市座光寺	2053			平成9年 1月20日 ~ 平成9年 3月13日	135	市道改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
ナギジリ一號古墳	古墳	古墳時代	横穴式石室		古墳時代 鏡 1点 金環 10点 銀環 2点 勾玉 4点 切子玉 5点 小玉 57点 馬具 12点 鉄鏃 74点 土師器・須恵器	出土遺物より6世紀後半の古墳である。 また三時期にわたり追葬が確認される。	

ナギジリ一號古墳

1998年3月31日発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地

飯田市教育委員会

印 刷 新 葉 社

